

515  
130



始



26. 4. 5

76048  
Tj



結婚

の夜

海外文學新選 (26)

葡萄牙文學

關 一 雄 譯

大正 14. 4. 24 内交



## ジュリオ・ダンタスの事ども

私達の時代は今や、イベリヤ半島の作家、プラスコ・イバニエスに就て數種の翻譯と紹介とを持つやうになつた。そして今まで日本に知られずにあつた半島の諸作家をも併せて紹介する機運が來たのであらう。私が茲に半島といふのは、其の西にある小國ポルトガルをも含むことは勿論である。

ここに述べるポルトガルの作家、ジュリオ・ダンタスは、スペインのプラスコ・イバニエスに似た文名と喝采と順境とを享けてゐるのである。然し後者は世界を舞臺とした老大な長篇を得意とする小説家であり、前者は劇作者にして詩人、その採る舞臺の多くは生國ポルトガルで、短かき一幕劇乃至小詩に長けてゐる。後者に於て大きな人生の脈を見るなら、前者に於ては巧みな微妙な言葉の一重ねを以て人の心を剝る匕首の鋭さを知るのである。まことは此の二作者は比較すべき境遇にあつて、比較すべからざる内容を持つてゐるのである。一八九九年、その處女詩集を公にしてより、既に二十年餘、ジュリオ・ダンタスの名は葡語國民、即ちポルトガル及ブラジルの兩國民の有する幾多の作家の上に抽で、其の作りし劇のうちには各國語に譯され、數回の上演を経たものが少くないのである。

順境を経上つたダンタスは、もと醫が本業なのであつたが、ふと作つた詩が世に認められて以來、一作ごとに、其の評價を高めたのである。今や、彼は、アカデミーの會員であり、國立圖書館長とい

## 編纂者

有島生馬	伊
千葉勉	英
笠井鎮夫	西葡
片上伸	露
ルビエンスキイ	波
永田寛定	西
田代光雄	獨
山岸光宣	獨
山内義雄	佛
横山有策	英
米川正夫	露
吉江喬松	佛

ふ要職に居る。彼はまた先に外務大臣になつた事もある。

彼の作の次第に多く、固まつた完成の傾きが出来て、稍やアカデミックの癖の出たことは見逃し得ない事である。然しそれは下り坂に面してゐるといふ事ではなく、未だ年壯な理想主義者として、今迄の如き活潑な、鮮かな、アムビションの代りに、大家の大きさと完全さとを示し始めたに過ぎない。要するに、彼の年熟すると共に、彼の偉大さと彼の本質とは完成されつつあるのである。

メンタスの作中で最も多く讀まれてゐるものに、*Mulheres* (1916), *Els e Ellas* (1918), *Patria Portuguesa* (1914), *Ao ouvido de Mme X* (1915), *Como elas amam* (1920) 等がある。

ここに私が譯したのはその中の *Como elas amam* であるが、その全部を譯したわけではない。*Como elas amam* は二十一篇の對話小説で成立つてゐるのであるが、其中の十四篇を選択して譯した。*Como elas amam* といふ表題は『如何に彼女等は愛することよ』の意味であるが、如何にも長たらく感じが悪いので、勝手ながら、最初の一篇である *Noite de Nupcias* 『結婚の夜』をとつて全體の表題とした。曾て一度も葡國文學の紹介されたものゝない折柄、この魁をなした「小なき功績」に免じて表題の事などは赦して貰ひたいと思ふ。

終りに拙譯について指教の勞を執られた笠井鎮夫氏に感謝の意を表して置く。

大正十四年二月

關 一 雄

## 目次

### 原作者肖像

結婚の夜 ( <i>Noite de núpcias</i> )	三
ニノンとニネット ( <i>Ninon e Ninette</i> )	一五
子 供 ( <i>Petizes</i> )	二五
二つの愛の精 ( <i>Os dois Amores</i> )	三七
桃色の眞珠 ( <i>As pérolas cor-de-rosa</i> )	九
許 婚 者 ( <i>Noivos</i> )	六三
黒色の男道化者と桃色の女道化者 ( <i>O pierrot negro e a pierrette cor-de-rosa</i> )	九
仕 へ る 事 ( <i>Servir</i> )	六七
蜜 月 ( <i>Lua d. mel</i> )	九九
三分間のドラマ ( <i>Um drama em três minutos</i> )	一一



結婚  
の  
夜

ジュリオ・ダンタス作  
關 一 雄 譯

✓ 錯 亂	者 (Genti complicada).....	三
✓ 愛 人	(Amantes).....	一〇
✓ 陶 製 の 人 形	(Os bonecos de Sèvres).....	一四
✓ 三 個 の 指 環	(Os três anéis).....	一六

結  
婚  
の  
夜



リリ嬢の結婚日。未婚女の部屋、英國風、葵緑色の絹や白色の漆器等で裝飾されてゐる。

リリは花嫁の装ひをし、鏡に向つて、唯一の裝飾品である耳環の眞珠をつけてゐる。十八歳、可愛らしい乙女、活潑、少しく男勝り、桃色の七寶のやうな皮膚、つんとした小さい鼻、金髪、まだ子供つぼいが、縹緞は良い方。

彼女の母は隅の長椅子に腰かけて、手袋を穿め乍ら、泣いた後のやうな赤い眼をして、娘の動作に見悅れる。

母——リリや！

リリ——はい。

母——二人でお話をしませう。

リリ——ええ。

母——教會へ行く前にお前に眞面目に聞いてもらひたいことがあるんですがね。

リリ——馬車がもう來てゐるわ、お母あさん。

母——まだ半時間もあるから大丈夫ですよ。

リリ——ね、お母あさんのこの眞珠、あたしによく似合つて？

母——本當に立派ですわ。

リリ——あたし、これをつけるとお母あさんに似てゐるわね。

互に接吻する。リリは母の側へ、長椅子に、腰を下ろす。沈黙……

母——ね、リリ！

リリ——何あに、お母あさん。

母——私ね、お前のお祖母さんが此の私に仰言つた事を繰り返しかへしてお前に言つて聞かせようと思ふんです、私が結婚した日に仰言つたことをね……

リリ——十八年も前の事なの？

母——十九年も前の事……

リリ——お母あさんはそれをまだ覚えてゐらつしやるの？

母——母親が言うた事は決して忘れられるものぢやありません、お前も女の子を持つたら、<sup>\*</sup> 乾度思ひあたるでせうよ。

リリ——あたし、子供なんかつくらないわ。

母——つくらないつて？

リリ——え、さう。

母——どうしてなの？

リリ——あたし、アントニオにさう言つたのよ、子供なんか欲しくないつて……

母——そんなことは私達の自由にならない事なのですよ、神様がお前の事を覚えてゐて下さるならお前にも子供が出来るのですよ。

リリ——神様は私達の事を忘れてゐて下さればよいがねえ。

母——子供を生むことは妻の義務なんですよ。私が結婚したのもそのためだつたのですよ。そしてお前の結婚するのも矢つ張りそのためなんです。

リリ——そんなことのためにあたし結婚するの？

母——さうですとも。

リリ——そんな事はじめて聞いたわ。

母——ね、お前に言つて聞かして置くがね、お前は昨日迄は子供だつたけれど、明日からはもう人妻なんですよ。

リリ——では今日は何なの、お母あさん？

母——花嫁ですよ。

リリ——では人妻と花嫁とどこが異ふの？

母——（困惑して）異ふといふ程異ひはしませんが。

リリ——お祖母さんは、その事を教へて下さらなかつたの？

母——教へて下さらなかつたの。それは處女にはわからない事なんです。

リリ——ではお母あさんにはわかつて？

母——お前にも今にわかつてくるでせう、お前の夫が一生忘れる事の出来ない或る秘密を耳許で囁くでせう、その時始めてわかるでせうよ。

リリ——駄目よ、あの人は冗談より他何も言はないんですもの。

母——私達を幸福にさすのはその冗談なのですよ、（彼女の手を取つて）耳をお貸しよ。

リリ——お母あさん、もう遅くなつたわ。

母——お前によく言ひ聞かして、お母あさんから頼んで置くが、お前の夫にいつも服従しなけりやいけませんよ、わかつて？ それにしても殊に今日は従順しくしなけりやいけませんよ。

リリ——どうして今日は殊に従順しくしなけりやならないのかしら？

母——結婚した最初の日ですもの。

リリ——でもあの人には、あたしに服従する義務はないのかしら。

母——そんなことがあるのですか。

リリ——権利は平等よ。命令するのはあたしの方だといふ事をお母あさんは御存じの筈ぢやなすもの。

母——でもあの方は随分教育はあり、非常にゆつたりしてゐて、ほんとうにお前の良い相手ですもの。

リリ——非常にゆつたりしてゐるんですつて？ そりや異ふわ。

母——どうしてです？

リリ——どうしてといつて、さうでないんですもの。

母——それぢや理由になりませんよ。

リリ——でも、あたしの嫌な家へ連れて行くんですもの。

母——お前はあのエストリルの濱の家は嫌なのかえ？

リリ——ええ。

母——お母あさんの家からあまり離れてゐるからかえ？

リリ——いゝえ、そんな理由からぢやないわ。

母——では、どうしてなの？

リリ——あたし、寢室が二つ欲しかつたのよ、それだのにあの方は一つだけで良いと定めちやつたんですもの。

母——お前の好いてゐた部屋は陽が當らなかつたね。

リリ——いゝえ、陽の當らないのはあの方の部屋よ。

母——それはリヨウマチスに悪いがねえ。

リリ——三十やそこらでリヨウマチスですつて？ リヨウマチスの人は結婚なんかしないわ。

母——私とお前のお父うさんも寢室をたつた一つしか持つてゐなかつたものですよ。

リリ——でも、それは一つの部屋に二つ寝臺があつたんでせう？ あの人はそれなのに、ダブルベッドが好きなのよ。

母——でもそれは家風なのです、家風は重んじなきやなりません、解つて？

リリ——あたしは男の方とは誰とも一緒に寝たことがない事をお母あさんはよく知つてゐらつしやるのに。

母——お前には實際困つてしまひますわ、かう言へばあゝ、あゝ言へばかうと言つて。リリや、あの人はお前の夫ぢやないの？

リリ——あゝ、矢つ張りあたしは自由ぢやないのね。

母——そんな無茶を言ふもんぢやありませんよ、お前はあの人の妻ぢやありませんか。

リリ——あたしは眼が醒めてゐる時にはあの人の妻で、眠つてゐる時にはもうあの人の妻ぢやないわ。もうさう定めちやつたのよ。アントニオもさう承知してゐるわ。

母——お前もさうそんな事を言つたのかえ？

リリ——えゝ。

母——そしたらあの人は何と言つて？

リリ——あたしが意見を變へる時が来るだらうつて。

母——私にもさうなきやなるまいと思へます。

リリ——お母あさん、何故笑つてゐるの？

母——お前はまだほんとうに子供だわね。

リリ——あたしもう何もかまはないわ。これからしようと思ふ事はすつかり決めちやつたのよ。

母——決めちやつたつて、それは何の事です？

リリ——これは秘密なのよ。

母——私に秘し事をしてゐるのかえ？

リリ——お祖母さんがお母あさんに十九年も前に言はれた事は何でしたの？

母——お前、それを知りたいのかえ？

リリ——知りたいわ。

母——ね、私達の生涯の幸福は皆結婚の最初の夜で定まつてしまふんだと仰言つたの。

リリ——（考へに耽つて）ではお母あさんは一生幸福になるため、結婚の最初の夜なにをな

すつたの？

母——言ふことをきいたのです……。

父——（戸口に現はれて）さあ、急がないか、玄關に馬車が待つてゐるよ。  
母——ではまゐりませう。

次の日、朝の十一時、エストリルの濱邊の家。リリ夫人はもう庭に出て、すがすがしい薔薇色の顔をし、満足の體にて、花を摘んでゐる。彼女の母、丁度そこへ來たばかり、二人相抱く。

母——リリや！

リリ——お母あさんですか。

母——ね、昨晚はどんなだつたの？  
リリ——ほんとに良かったわ。色々わからないことでもあるかと思ひましたが、結局別に何事もなかつたわ。

母——よく寝て？

リリ——ええ、ただ一寝入りぐつすり。

母——寢心地に別段變りはなかつたかえ？

リリ——ええ、寢心地は確かに異つてたわ。お母あさんの仰言つた通りね、ダブルベッドの方が遙に寢心地が良いわ。

母——？

リリ——腕は伸し放題、足は擴げ放題……。

母——そしてお前の夫は？

リリ——あたしに何も睡眠の邪魔をしなかつたわ。

母——では一體どこへ寝たの、お前の夫は？

リリ——床へ寝たの。

ニ  
ノ  
ン  
と  
ニ  
ネ  
ッ  
ト

未だ二十にもならない二人の姉妹の寢室。ミユッセの本を読んだ事のある父は、二人をニノン、ニネットと稱んでゐる。

部屋には丁度搖籃のやうに小さい二個の寢臺があり、白い漆器や鏡やレースが置かれてある。

ニノン、少しく褐色めいた皮膚、悲し気な顔付、金髪、深い眼ざしである。

ニネット、白い皮膚、薔薇色の顔、金髪、落着かぬ性質、少しくお轉婆である。

曙の四時頃。二人とも舞踏會から歸つて來たところ、寢るために着物を脱ぐ。

ニノン——去年よりも良いと思つて？

ニネット——ええ、去年よりも良いと思つたわ。それに若い男が澤山ゐたし……。

ニノン——まあ、そんなに大勢！

ニネット——でも、みんな踊らなかつたわ。まあ、何て暑いんでせう、頭がぼつとしちやつたわ。

ニノン——そりや、シヤンペンを飲んだからよ。

ニネット——夜中あんまりあばれたかららしいわ。なぜあんたは踊らなかつたの？

ニノン——もう嫌になつちやつたんですもの。

ニネット——それぢやもうお婆あさんになつちやつたのね。あたしの贅澤な襦子の夜會靴を一寸見て御覽なさいよ、まあなんて汚なくなつたんでせう。

ニノン——私のは、……まだ一度も穿かないやうね。

ニネット——さうね。あたし、あんたのやうにブリツヂ(カクタの靴)はやらなかつたわ。踊つたり、跳ねたり、男に色眼をつかつたりなんかして、馬鹿なことをしちやつたのよ。だけど随分面白かつたわね。

ニノン——戀することは靴を踏んづけることなの？

ニネット——知らないことよ。多分さうでせうよ。あのシコ・バルボンがあたしの足を踏んづけちやつたのよ。あの人は踊る時にはいつも内へ踏み込むのよ。

ニノン——あんたはあの人と随分はしやいでゐたわね。

ニネット——ほかの皆ともさうよ。男の方はみんなあたしを好くんですもの。

ニノン——でもあんたは誰が一番好きなの？

ニネット——誰も好かないわ、そんなものを選んでゐる暇なんかありやしない。

ニノン——べべさんがあなたのことばかり話してゐたわよ。

ニネット——べべさんはいつも女なら誰のことでも話してゐるのね。なんでも一人の男のことばかり思つてゐるなんてつまりやしないわ。

ニノン——さうでもない事よ。

ニネット——さうでもないなんて思ふのは、あなたが一人の男を好いてゐるからだわ。

ニノン——多分、さうでせうよ。

ニネット——あゝ、あゝ、同じ人の事ばかり思つてゐるなんて、なんて馬鹿馬鹿しい事なんでせう。

ニノン——あなたが想像してゐるよりは氣持が良いことよ。

ニネット——では、あなたはいつも同じ着物を着たり、同じ小説ばかり読んでゐるのが好きなの？

ニノン——女の心といふものは一人の男に慰められる事が必要なんですよ。

ニネット——あたしは總ての男に慰められてゐるんだわ。一時にみんなの事を思ふのよ。それがどんなに愉快なことだかあなたにはわからないんだわ。(寢間着に着更へ乍ら欠伸して) あ

あ、眠い、なんて眠いでせう！

ニノン——眞珠を外さないの？

ニネット——頭がぐらく／＼してゐるわ。煙草を飲ませられちやつたのよ。

ニノン——煙草を？

ニネット——たつた一本の煙草、シコが呉れたあの煙草よ。マーベルさんは男のやうに煙草を喫むぢやないの？ パイプをくはへて家中を歩き廻るぢやないの？ (寢床にもぐり込んで) ああ、氣持が良い、一人で寝るつ位氣持の良いことはないわ。

ニノン——ではあなたは誰かと一緒に寝たことがあると見えるわね。

ニネット——あたし時々お母あさんのことを考へるのよ、二十年も男と寝て暮した……。

ニノン——お父うさんはただの男ぢやないわ。

ニネット——ぢや何なの？ 男の人が夜中あたし達の側にくつついてゐたら、随分厄介に違ひないわ。

ニノン——馬鹿な事を言ふのはいゝ加減におやめなさいよ。

ニネット——燈を消してよ、もう眠いわ。



ニノン——（電燈のスキッチをひれつて）お休みなさい……。

二〇

ニネット——お休みなさい……（暗黒の中、暫く沈黙の後）あの香は何でせう？

ニノン——花の咲いてゐる庭のアカシヤの香でせう。

ニネット——あたし、頭が痛くなつたわ、（口輕に）あんたシヤンペンうまかつて？ さつきのあれはポムメリイ（酒の香）だつたのね、あたしポムメリイは嫌ひだわ、赤いミュンの方がよつぽどいいと思ふわ。あそこには随分いい男がゐたわね。さうでせう？ あんたはあのロイド・ヂョウヂ夫人が「若い女子は青年男子と俱に教育されねばならぬ」つて言はれたことを知つて？ ロイド・ヂョウヂ夫人はかう言つてゐたわ……私の少女時代には、私は男の子とよく遊んだ……つて。あたしもさうよ。ぐるりにうんと男を持つてゐて而も誰にも熱中しないつていふのがあたしの主義なのよ。

ニノン——眠いなんて言つて、まだ眠らないの？

ニネット——アカシヤの香（ヒュウ）のため眠れないで起きちやつたわ。……（突然電燈をつけて）あんた何してゐるの？

ニノン——何もしてゐやしないわ。燈を消さないよ、

ニネット——知つてゐるわよ、もう。寫眞を見てゐたんでせう。

ニノン——眞つ暗闇でそんな事が出来るものですか。

ニネット——ぢや接吻してゐたんでせう。さうらしいわ。

ニノン——接吻してゐたからつて、それがどうしたと言ふの？

ニネット——もうようくわかつてよ。ジヨアンの寫眞でせう。あんたを好かない男の寫眞に接吻するなんて、もう愛想がつきちやつたわ。

ニノン——でも、私が好きなんだから構はないわ。

ニネット——いつの世にも馬鹿な女がゐるもんね。

ニノン——けれど、私、こんなに幸福だわ。

ニネット——あたし達を顧みて呉れない男なんか戀したつて、何で幸福なもんですか。

ニノン——あんたの言つてゐる事は間違ひだと思ふわ。或る一人の男を戀する事……それはほんとうに美しいことよ。

ニネット——美しいと言ふことは愛さないで愛されることだわ。そして大勢にちやほやされ、ばされるほど幸福だわ。

ニノン——あなたの番が廻つて来て、あなたがその境遇になつてみればわかるでせうよ。  
ニネット——そんな番なんか廻つて来やしないわ。でもジョアンがあなたにしたやうなことは、  
あたし誰にもさせないわ。

ニノン——私を愛するやうにあの人を強制することは不可能だわ。

ニネット——でも、あなたはあの人を柔順やうじゆんくすることは出来るわ。

ニノン——私があの人を戀するのは、こつちの勝手で、あの人を知つた事ぢやないわ。

ニネット——ジョアンはあなたの事を悪口言つて笑つてゐるわよ。

ニノン——時々、私があんまり出しやばつたものですから。

ニネット——あなたはあの人ほかの女ひとと結婚するつて事を知らないの？

ニノン——知つてるわ。

ニネット——それでもあなたはあの人ほかが戀しいの？

ニノン——すうつと前から私は戀してゐたのよ、そして今でも……。

ニネット——それなのに、あなたは平氣ですましてゐられるの？

ニノン——私にはあの人ほかの幸福を破る權利はないわ。

ニネット——では、あなたはそれをも戀と呼ぶの？

ニノン——あの人を想ひ暮して、あの人ほかの寫眞を抱いて寝て、あの人ほかの幸福を祈つてゐるのだわ。時々、私苦しむの、そして泣くのよ。

ニネット——可哀想ね、ニノンさん……。

ニノン——でも何でもないの。それでも私、幸福だわ。

ニネット——あたし、同情するわ。

ニノン——人を戀する時、人間はこの世にあつていつも幸福ですわ。

ニネット——(暫くして後)私の腕は美しいでせう。(淋しさに)あたしはあたし自身みづかみのほか好きないのよ……。

ニノン——(燈を消して)お休みなさい……。

ニネット——お休みなさい。

暗黒。やがてレースと絹すれの音が聞える。

沈黙……。

ニノンとニネット

子

供

ルキ十五世時代風の小さい客間。

二六

レナ、姉、十八歳。ひどくお母あさん振つて、ブルジェの新著を一生懸命に読んでゐる。

ギードが入つて来る。八歳の妹、短いスカートを着けて、黒い瞳をし、髪を蝸牛巻にして、大きな白い帽子を被り、ラケットを手に持つてゐる。  
グリホンと云ふ犬が後から従つて来る。

暫く経つて、ペドロが来る、九歳、金髪の少年。落ち着き拂つて澄ましてゐる。腋の下に一冊の本を持つてゐる。

ギード——レナ姉さん！

レナ——（本から眼も上げずに）なあに？

ギード——ペドロ兄さんと散歩に行つていいでせう？

レナ——何處へ？

ペドロ——庭の方へ……。

レナ——いけません。

ギード——なぜなの？

レナ——マルガレトさんとでないといけません。

ギード——でもマルガレトさんは病氣なのよ、頭が痛いんですつて……。

レナ——マルガレトさんとでない駄目……。

ペドロ——でも僕ギードに氣をつけてやるよ、ね、テニスやりに行くんだもの……。

レナ——でも陽がカンカン照つてゐますよ。

ギード——あたし、帽子をかぶつてゆくわ。

レナ——（面倒くささうに、本を読み出しながら）では行きなさい。でも、テニスはしない方がいいよ。

ギード——何をやりに行きませうか？

ペドロ——本を読まうよ。

レナ——何の本なの、それは？

ペドロ——神話！ お父うさんの本箱にあつたんだよ。

ギーダ——ペドロ兄さんは變な本ばかり讀んでるのね。  
レナ——マルガレトさんにね、ギーダに赤い傘を渡すやうにと言つて頂戴。ペドロさん、氣をつけてやんなさい。日なたを歩いてはいけませんよ。

二人一緒に驅けて出る。グリホンが雪の玉のやうに後から従いて行く。

レナ、尙もブルジェの本を讀みつづける。

庭の中。木蔭に木の腰掛一つ。黄色の樹立。咲き亂れた紫荊まじすばうの紫の一塊。ギーダとペドロは腰掛に腰をおろして、びつたりくつき合つて本を讀む。赤い日傘が陽に輝く。グリホンは眠りはじめる。

ペドロ——(本を讀む)「さうしてレダが氣を失つてしまふと、ジュピターは腕で彼女を抱き起し、彼女の口に優しく接吻しました……」  
ギーダ——それから?

ペドロ——それからね……(本を閉ぢて)何でもないので。

ギーダ——もつと讀んでよう、ね、ね、もつと……。

ペドロ——いやだ。

ギーダ——なぜなの? どうして讀まないの?

ペドロ——(箴言的に)女の兒はこんなものを讀むもんぢやないんだよ。

ギーダ——そんなら兄さんは出来るの?

ペドロ——だつて僕あ男だもの。

ギーダ——あたしだつて婦人きんよ。

ペドロ——(笑つて)おまへが婦人きんだつて?

ギーダ——よう、讀んでよう、あゝ、わかつた、なぜ讀まないかといふと、接吻アイシムのことが書いてあるからよ、屹度さうよ。

ペドロ——さあ、テニスをやらうよ。

ギーダ——陽が照つてゐるぢやないの、それにレナ姉さんがやつてはいけないつて言つたぢやないの。

ペドロ——それちや犬と遊ぼうよ。

ギーダ——（暫くして後）接吻はいけないことなの？  
ペドロ——僕知らないよ。

ギーダ——レナ姉さんはあたしに接吻したことよ。  
ペドロ——そりや悪くはないさ。

ギーダ——それからサンクルの姉さん達も接吻したことよ。  
ペドロ——そりやまた異ふんだよ。

ギーダ——そんならどこが異ふの？

ペドロ——だつて大人ぢやないんだもの。

ギーダ——では大人の接吻は悪いことなの？

ペドロ（困つた風をして）そりや、わかつてることさ……（話題を變へて）ラケットを持つて来た？

ギーダ——ここにあるわ（執拗つく）それから何のためジューピターはレダに接吻したの？  
ペドロ——そりや愛してゐるからだよ。（犬の方を向いて）グリホン、こつちへ来い。

ギーダ——犬なんかどうでもいゝぢやないの……。それから、どうして男の人は好きな女の人に接吻するの？

ペドロ——そりや、さういふ習慣だもの。

ギーダ——大人がする接吻は大變氣持がいゝことなの？

ペドロ——良いとも……。

ギーダ——兄さんは小さい女の兒に接吻したことがあつて？

ペドロ——あるよ。

ギーダ——どんな氣持なの？

ペドロ——お父うさんはおまへに接吻しなかつた？

ギーダ——お父うさんはあたしの生れる前に死んぢやつたのよ。

ペドロ——あゝ、さうさう。

ギーダ——（一寸沈黙して）ね、ぢやあどんだかあたしに接吻してよ。

ペドロ——いやだ。

ギーダ——こはいの？

ペドロ——何がさ。

ギーダ——では接吻<sup>ペイジ</sup>して、ね。

ペドロ——そんならするよ。そら（優しくギーダの額に接吻する）

ギーダ——何ともないわ。

ペドロ——そりや額にしたからさ。

ギーダ——へんだわね。

ペドロ——うん。

ギーダ——本には何て書いてあつたでせう？

ペドロ——読んでごらんよ。

ギーダ——（本を読む）「さうして、レダが氣を失つてしまふと、ジュピターは腕で彼女を抱き起し……」

ペドロ——（ギーダを抱いて）かうするんだな。

ギーダ——「彼女の口に接吻しました……」

ペドロ（ギーダの口に接吻して）かうして……。

ギーダ——どんなだつて。

ペドロ——何ともないや。

ギーダ——あたしも何ともなかつたわ。それからジュピターとレダが接吻<sup>ペイジ</sup>してどうなつたの！

ペドロ——知らない。

ギーダ——（本を渡して）読んでごらんさい、さあ……。

ペドロ——（読みつづける）「彼女の口に優しく接吻しました、そしてこの接吻からレダは二人の子供を産みました……」

ギーダ——（口を挿んで）そんなことになつちやつたの。

ペドロ——あゝ。

ギーダ——見せてよ。

ペドロ——二人の子供だよ。

ギーダ——あれまあ！

子 供

ペドロは身動きもせず、木蔭に消え行くギーダの白い帽子を見るときも、視つめてゐる。

三四

前と同じきルキ十五世紀時代風の部屋。  
暫くの後、レナは未だブルジェの本を読んでゐる。

ギーダ——（息苦しく、喘ぎながら部屋に入つて）レナ姉さん！  
レナ——どうしたの？

ギーダ——あつし、随分疲れちやつたわ、駆け通して来たんですもの。  
レナ——日なたに出たの？

ギーダ——いゝえ。

レナ——ペドロさんは？

ギーダ——庭にゐるわ。

レナ——一人ぼつちにして来ちやつたの？

ギーダ——えゝ、さう。

レナ——なぜなの？

ギーダ——あつし、もうあの人の側にゐるのは厭なの。

レナ——何か悪いことでもしたの？

ギーダ——（少しの間黙つて）あつし一つの秘密があるのよ、話してあげませうか？

レナ——秘密があるんですつて？

ギーダ——えゝ、あるのよ。

レナ——そんな八歳やっつやそこらで？

ギーダ——大へんな秘密なの。

レナ——では、なあに？

ギーダ——誰にも言はない？

レナ——えゝ、誰にも言はないことよ。

ギーダ——マルガレトさんにも？

レナ——えゝ。



ギューダ——何だか當ててごらんなさい。

レナ——?

ギューダ——あたしもうお母あさんになるのよ。

二つの愛の精

月明の夜。

フロレンスの或る大邸宅の宴會。

庭園の上空をワットウの描いた、Départ pour Cythère から抜け出たと思はれるやうな二人の愛の精が飛び廻つてゐる。

大人の愛の精。成熟した體、悲し氣な眼付、疲れた表情。

子供の愛の精。丸ぼちやで、小さく、愛くるしく、桃色の顔。

二人とも庭の上を飛んで、軽い羽が銀の翼のやうに月の光に閃めいてゐる。暫くして館の屋根に降りて、メムリングの子供のやうに窓口の欄干に腰を掛ける。樂の音が聞えて来る。

蜜柑の淡い香があたりに漂うてくる。

(便宜上「大人の愛の精」を「兄」とし「子供の愛の精」を「弟」として示す——譯者)

弟——此處なの？

兄——此處だよ。

弟——此の家に誰が住んでゐるの？

兄——今日結婚した二人の夫婦だよ。

弟——あの窓は何なの？

兄——あれはその二人のゐる部屋の窓だよ。

弟——(窺ひつつ)何も見えないや。

兄——二人とも今ゐないんだもの。

弟——何處にゐるの？

兄——別荘の大廣間で客をもてなしてゐるんだよ。

弟——歸りは遅いかしら。

兄——うゝん、新婚の者は遅れる事なんかかないよ。

弟——ここへ来る時には燈をつけるかしら。

兄——うむ。

弟——見たらどんなに綺麗だらうね。

兄——でもすぐ燈を消しちまうからね。

弟——ぼく達は此處に残つて待つてゐるの？

兄——待つてゐようよ。(二人の愛の精は抱き合つて待つてゐる。暫く沈黙) おい！  
弟——何？

兄——何故ぼくが今夜おまへを此處へ連れて来るやうに、お母あさんのシブリスにお願いした  
か知つてゐるかい？

弟——知らない。

兄——お前に教へてやるためだ。

弟——何を？

兄——兄さんの職業をさ。

弟——兄さんの職業つて何なの？

兄——ぼくは愛の精なんだ。

弟——愛の精は何をするの？

兄——地球上の男をして愛させるんだ。

弟——男だけ？

兄——鶯でも、蛙でも、花でも……。ほらあの下の庭の樹の蔭に二匹の蝶が相手を見つけなが  
ら飛んでゐるだらう、まるで翼の生えたダイヤのやうに光つてゐるのが見えるだらう。

弟——あゝ、見える。

兄——よく見な、今、そら、接吻したらう、あれはこのぼくがやらせたのだよ。

弟——それちや女は？

兄——女は駄目だ。

弟——女には愛させてやらないの？

兄——女は愛さないで、愛を受け容れるもんだよ。

弟——あゝさうか。

兄——ぼくが女を動かすには、女に心といふものがなくちや駄目だ。

弟——女には心がないの？

兄——ほんのぼつちりしかないよ、それに此の花のやうに乾からびてゐるんだからね。

弟——何故なんだらう。

兄——神様は女の乳房を創るためにあんまり時間を費されたので本當の心を創るのを忘れてし

まはれたのだ。

四二

弟——可愛想なことだなあ。でも兄さんは永い間、蝶や、蛙や、花などを愛させて來たの？

兄——さうとも、もう一萬年も前からだ。

弟——それでもまだ年を寄らないの？

兄——愛の精はいつ迄たつても年寄にならないんだよ。

弟——でも随分疲れてゐるらしいね。

兄——愛の精は直きに疲れるもんだ。

弟——お母あさんのシプリスも、兄さんは疲れてゐるつて言つて居られたよ。

兄——だから、愛するものはこの世を憐むのだよ。

弟——昔の戀は愉快だったの？

兄——あゝ、薔薇の冠をかぶつて、名をアナクレオンテと言つたものだ。

弟——では今では？

兄——今ちや自分の詩神ミュゼと俱に泣くのだ、そしミュゼと名乗るのだ。

弟——戀はどうして悲しくなつたの？

兄——このぼくがもう疲れたからだ。だから、薔薇園に花を咲かせ戀を愉快にする小さい若々

しい神がぼくの代理をしに來て呉れなけりやならないんだ。

弟——それちや何處にその小さい神がゐるのだらう。

兄——それはお前だよ。

弟——でもぼくは戀といふものはちつとも知らないもの。

兄——覚えればいいんだ。ぼくがお前を新婚者の部屋の窓へ連れて來たのはそれがためなんだよ。

弟——では戀するといふことはどういふことなの？

兄——接吻することだ。

弟——それつきり？

兄——それから離れるのだ。

弟——それから終しまひには？

兄——しまひには忘れるのだ。

弟——どの位の間その接吻がつづくの？

兄——ほんの瞬間さ。

弟——そして忘れてゐる間はどれ位なの？

兄——一生の間さ。

弟——二人の子供が戀するのを見たかつたなあ。

兄——二十以前は戀なんかしないものだ。

弟——それぢや二人とも年寄つてから戀するんだね。

兄——二十を過ぎたらもう戀は出来やしない。

弟——二十になつた時だけ戀するの？

兄——眞の戀は一度しきや花が咲かないんだ。

弟——ね、二人が來たらしいよ。

兄——なに、まだだよ。

弟——遅れて來るのかね。

兄——今頃は廊下を接吻しながら來る時分だが。

弟——花嫁は美しいかしら？

兄——愛される女はいつも美しいものだよ。

弟——花嫁は金髪かしら？

兄——雉が日光に照された時のやうな髪だよ。

弟——碧い眼かしら？

兄——うむ、そして俗に言ふ「嘘つき女の鼠齒」つて奴をしてゐるよ。

弟——胸をあらはにしてゐる？

兄——魂までもあらはにしてゐるよ。

弟——そして花嫁は？

兄——お前は、ベニスを通つた時、チントレットの描いた「三人の東方の博士」を見たらう。

弟——うむ。

兄——丁度花嫁はあのやうな奴だよ。色が薄黒く、體がでかくて……。

弟——二人が微笑んで、接吻し、抱き合ふのが見えるかしら？

兄——見させてやるよ。

弟——丁度あの蝶のやうに？

兄——丁度でつかい蝶のやうにな……。」  
弟——ちや、どんなに綺麗だらうなあ。」  
兄——ほら、聽いてごらん。

側の窓に燈がつく。

兄——(カーテンのレースを透し見て)あの二人だよ。」

弟——覗かしてよ。」

兄——今は駄目だ。」

弟——一寸でいゝからよ。」

兄——音をさせちやいけないよ。」

弟——見たいなあ。」

兄——(暫く経つて)そら、覗きな！」

弟——(覗いて視線を外して赤くなる)あゝ——(悲しうに後を顧み)あゝ——(兄の帯色の肩に頭

を凭らして泣きさうになる)あゝ——

兄——どうしたんだ？」

弟——(好奇心が満足されたやうに)戀といふのはあの事か……。」

桃色の眞珠

或る寶石屋。澤山の大きな黒塗の飾棚がある。薄暗い中に銀が光つてゐる。

五〇

×××子爵夫人が入つて来る。三十歳、瘦形、活潑で神経質、黒ずんだビロードの外  
套を着て、白の儀式帽を被り、獺の筒手袋を手にはめてゐる。

寶石屋、金髪、禿げた頭、高尚な風、アメリカ式に刈つた錆色の小さい髭、手に寶石  
を一杯持つて、お辭儀をして、子爵夫人を迎へる。

寶石屋——子爵夫人でございますか。

子爵夫人——もうあの指環は出来て居りますか？

寶石屋——未だでございますが。

夫人——まだ出来ないの？

寶石屋——はい、あの薔薇色の寶石を締めこまなきやなりませんものですから。しかし明後日  
は必ず出来る筈でございます。

夫人——屹度ですね、あの指環なしで外を歩くのは何だか気が引けてね。

寶石屋——屹度でございます。

夫人——私の家へ届けて呉れますか？

寶石屋——お宅へお届け致します。

夫人——（顧みて）綺麗な物が澤山あるでせうか？

寶石屋——少しはございます。リスボンでは近頃随分寶石の賣行が宜しうございます。

夫人——西班牙へ持つて行くためですか？

寶石屋——西班牙へも持つて行きますが、當地に留るのもございます。（寶石箱を開けながら）

夫人、ここに一寸風變りなX形のがございますが。

夫人——眞珠はあまり好みませんわ。

寶石屋——眞珠はお嫌ひでございますか？

夫人——私の皮膚には良く合ひませんからね。

寶石屋——もつと尤でございます。皮膚があまりに白いお方には眞珠はあまり映えませんが。しかし  
澤山あるのでございますが。（刷毛にて埃を除け他の箱を開く）これは屹度夫人のお氣に召すと  
思ひます。

夫人——？



寶石屋——耳環でございます。夫人、この桃色の大真珠をもらんで下さいまし、これはルキ十六世時代風のものでして、ほら、こんなに光つてゐる二個の鎖が附いて居ります。

夫人——まあ美しいこと！

寶石屋——これは私共の店で一番變つたものの一つでございます。英國レジュントストライトのエルキントン會社製で純粹なものでございます。リスボンにはこれ以上のものはありません。まい。夫人、この真珠の光澤をもらんで下さいまし。

夫人——私が見た中で一番美しいものですわ。

寶石屋——如何でございます。

夫人——本當に氣に入りましたわ。多分宅で今日私の寶石を買ひに来るでせうよ。明日は私の誕生日なのですから。若し來ましたら、この耳環を見せてやつて下さい。

寶石屋——（笑つて）もうこれは賣約済になつて居るのでございます。

夫人——もう賣れてしまつたの？

寶石屋——ええ、今朝です。夫人、お祝ひ申し上げます。

夫人——でも誰に賣れたんですの？

寶石屋——あなたの旦那様にお賣りしましたのですから。

夫人——へえ、さうですか、そりや面白いことですね。

寶石屋——そして私に銀行へ午後持つて來いと仰言いました。もう代金はお拂ひ済になつて居ります。

夫人——（感に堪へぬやうに凝視して）宅はよく寶石に眼がきくんですよ。屹度私によく似合ふでせうよ。

寶石屋——夫人のためわざわざ誂へたやうに思はれます。この箱をお選びになりますか、それとも他の色のにございますか？

夫人——どつちでも構ひませんわ。指環の方は忘れないやうにね。

寶石屋——（自動車迄彼女の後に従ふ）さよなら夫人、御手に接吻致します。

×××子爵夫人の家。午後五時。近代風を加味したフランス帝政時代風の小さい部屋。ジェモン會社製の白と金色の家具で飾られてある。

子爵夫人の獨りゐる處へ、レンドフェ夫人が入つて來る、四十五歳、ベニス式の金髪、

少しく色香失せた美しさ、アイルランドの馬のやうな體格、ブリタニア生れ、小さな水色の縁なし帽を被り、透き通るやうな色をした上品な器用さうな手、人好きのする性質。

下男が茶卓を持つて來て後去る。

レンドフェ夫人——御機嫌は如何です？

子爵夫人——気分があまり良くないのです。

レンドフェ夫人——して旦那様は？

子爵夫人——外出致しました。

レンドフェ夫人——あなた少し顔色がお悪いやうですわね。

子爵夫人——良く眠らなかつたからでせう。

レンドフェ夫人——昨日も顔色がお悪いやうに思つてゐましたが、どうかなすつたのですか？

子爵夫人——私もう三十歳になつてしまひましたの。

レンドフェ夫人——私も明日あたり満三十歳になるのだつたらと思ひますわ。

子爵夫人——でも二十九歳の方が三十歳になるのは悲しい事でございますよ。

レンドフェ夫人——三十歳は私達の生涯で一番よい年ですわ。

子爵夫人——さう男のかたも仰言いますがね。

レンドフェ夫人——そして男のかたは私達よりも一層よく女といふものを理解しますものですわね。

子爵夫人——お茶をおあがりになりますか？

レンドフェ夫人——え、毎日戴いて居ります。(茶が出る)あなたは「三十歳の女」をおよみになりましたか。

子爵夫人——私、バルザックはあまり好きませんもの。

レンドフェ夫人——私の方を一寸ごらん下さい。あなたの眼は随分充血してゐるやうにお見受けしますが。

子爵夫人——光りのためでせうよ。

レンドフェ夫人——あなたの方お二人で意見の衝突でもなさつたんぢやないですか？

子爵夫人——誰がですか？

レンドフェ夫人——旦那様とあなたと……。

子爵夫人——いゝえ。

レンドフェ夫人——でもあなたのお手は震へてゐるぢやありませんか。そして氷のやうに冷めたくて……。どうなすつたのです？

子爵夫人——私、あなたに聞いて戴きたいことが澤山あるのです。

レンドフェ夫人——さうですか、いつだつて何かしら話題はあるものです。

子爵夫人——（ベルのボタンを押して）えゝ、ありますとも。

レンドフェ夫人——聞いて貰ひたいことがおありださうですが、一體何のお話ですか？

子爵夫人——（出て来た下男に向つて）私、誰にも面會しませんから、そのつもりで……。下男——かしこまりました。

レンドフェ夫人——あのね、ガブリエラさんが今日ここへいらつしやいますよ。私逢ひましたら左様言つていらつしやいました。

子爵夫人——私が家に居るつてお言ひになりましたか？

レンドフェ夫人——えゝ、言つてしまひました。

子爵夫人——（下男に向つて）それではね、唯サンブラッド男爵の夫人だけは別ですよ。

下男——（出ながら）はい！

子爵夫人——これでお話がつづけられます。

レンドフェ夫人——一體何のお話ですか？

子爵夫人——私の夫の事についてです。

レンドフェ夫人——男の方のお話ですか？

子爵夫人——私の夫は私を瞞してゐるのでございますよ。

レンドフェ夫人——男といふものは女を瞞してばつかりゐるものですね。私の夫もさうでございますわ。

子爵夫人——でも私はあなたのやうに悟りを開いて居りませんから、つい嫉妬に走つてしまふのです。

レンドフェ夫人——それはお氣の毒ですわね。

子爵夫人——それにあなたとも年配も異ひますものですから。

レンドフェ夫人——嫉妬といふものはいつも三十代のもですよ。でもどうしてあなたは旦那

様があなたを瞞してゐらつしやる事をお知りになりましたの？

子爵夫人——ひよつとした事からなのですよ。

レンドフェ夫人——ですから私もその「ひよつとした事」が嫌ひなのです。でもあなたのお思ひになつてゐることは確かでございますの？

子爵夫人——少々疑問の點もあるのですけれど。

レンドフェ夫人——では誰と何をなさつたと仰言るのです？

子爵夫人——それは存じません。

レンドフェ夫人——では何がその緒いとちになつたのでございますか？

子爵夫人——斯うなのでございます。私の夫が一昨日リスポンの寶石屋で耳環を買つたのですが、それは私のために買ったのではなかつたのです。

レンドフェ夫人——あなたの爲に買はれたのでないといふ事を誰からお聞きになりましたの？  
子爵夫人——若し私のために買って呉れたのであれば、昨日私の誕生日に呉れる筈ですのに呉れませんでしたから。

レンドフェ夫人——では旦那様はあなたに何を下さいました？

子爵夫人——お金を呉れました。パリへ注文した帽子と着物のお金を……。

レンドフェ夫人——リブー商店へですか？

子爵夫人——いゝえ、レオン會社へですの。

レンドフェ夫人——私なら寶石よりも帽子の方を選びましたでせうよ。してそれは何の裝飾品なのですか？

子爵夫人——耳環なのです。

レンドフェ夫人——それを旦那様がお買ひになつたことは確かなことなのですか？

子爵夫人——寶石屋で私それを手に執つてみましたが、支拂濟になつて居りましたのです。

レンドフェ夫人——ではあなたのお母様のためにお買ひになつたのでせう。

子爵夫人——寡婦に桃色の大きな眞珠などを買つてやる人などありませんわ。

レンドフェ夫人——ではどこかの教子に買つておやりになつたのでせう。

子爵夫人——教子などに四五コント(二千圓乃至二千五百圓)する耳環などやる人はないと思ひますが。それにそんな教子など私の知つてゐる限りでは、ない筈です。

レンドフェ夫人——多分寶石屋へ取りにいらつしやらなかつたのでせう。

子爵夫人——銀行へとだけさせたのですよ。

六〇

レンドフェ夫人——間に合はなくてお受取りにならなかつたのでせう。  
子爵夫人——いゝえ、受取つたのですよ。

レンドフェ夫人——どうして知つていらつしやるのです？

子爵夫人——寶石屋から聞いたのです。今電話で話したばかりですもの。

レンドフェ夫人——そしたら何と言ひました？

子爵夫人——寶石屋は私が耳環を手に入れたものと思つてゐるのです。

レンドフェ夫人——して見ると、男といふものは愈々怪物ですわねえ。

子爵夫人——（涙を拭いて）ほんとに怪物です。

レンドフェ夫人——でも、男は假令どんなであらうとも、そのまま受け入れるよりほか仕方がありません。男つてみんなそんなものですから。あなたは旦那様に何かお言ひになりましたか？  
子爵夫人——いゝえ。

レンドフェ夫人——あなたはその耳環を見たら、それと見覚えがありました？  
子爵夫人——えゝ、よく覚えて居りますわ。

レンドフェ夫人——では旦那様には何も仰言らないであらつしやい。

子爵夫人——何も言ふなと仰言るのですか？

レンドフェ夫人——えゝ、旦那様には何も言はないであらつしやい。そしてあなたのお友達の耳によく注意してゐるのです。かういふことはいつも私達の最も親しい友達の間にかかる事ですからね。でも見て下さい、私の耳にはそんな耳環なんぞかかつて居りませんよ。

下男——（知らせに来る）サンブラッド男爵夫人がお見えになりました。

男爵夫人が入つて来る。シャルトランの畫に似てゐる。黒眼で金髪、愛らしく、輕薄で、腰を蛇のやうに振つて歩く性質。頗る美人。

男爵夫人——お機嫌は如何？ 御主人は？ 私、喉が渴いてもう死にさうなのです。濟みませんが、お茶を一杯下さいませんか？

レンドフェ夫人——（男爵夫人に向つて）左様なら、カブリエタ様！

子爵夫人——（男爵夫人に）私、あなたを待つてゐたんですよ。

二人互に接吻する。

男爵夫人の耳には、薄く金色を帯びた皮膚の上に、一際目立つて二個の桃色の眞珠が煌めいてゐる。

子爵夫人は、その眞珠に眼をつけると、胸さわぎがして來て、顔色思はず青白くなる。然しその感情を無理に抑へて微笑む。

男爵夫人——あなた、私の耳環を見てゐらつしやるの？

子爵夫人——いゝえ、耳環など氣が付きませんでしたわ。

男爵夫人——この耳環は昨日貰ひましたのよ。美しいでせう？ 英國品で、レジエント・ストライトのエルキントン製です。リスボンにはこれ以上のものはないさうですわ。

子爵夫人——……？

二人は會話をつづける……。

## 許婚者

モンテ・エストリル倶楽部の屋上庭園。午後四時。静かなる雰圍氣。陽の光は暗い。籐の椅子に二人の許婚者が腰をかけてゐる。

彼女、十八歳、落ちつかぬ性質、瘦形、傲慢、碧眼、凄い程の美、敏捷な足、白色の羚羊皮の靴、名前はヴィットリア、人々はビビと稱んでゐる。

彼、二十五歳、金髪、朴訥で沈着の性質、英國風、人々はドン・ジョゼと稱んでゐる。無聊に苦しむといつた風、しかも親しみ深き二人の様子。

ブラアムスの六調子のハンガリアン・ダンスが奏でられる。

前面には灣が展開して、今や、オランダ汽船が出帆せんとしてゐる。

ビビ——（沈黙の後）ね、ちよつと！

ジョゼ——なに？

ビビ——私達ほんとに明日結婚するの？

ジョゼ——多分……。

ビビ——それだのにまだ用意がちゃんと出来てゐないの？

ジョゼ——もうすつかり出来てゐるよ。

ビビ——誰が用意したんです？

ジョゼ——我々の両親がさ……。

ビビ——でも私達の親が結婚するんぢやないんでせう、それはあなたと私ぢやないの？

ジョゼ——だから、どうしやうといふんだ？

ビビ——ですから二人でちゃんと定める必要があるんぢやなくて？

ジョゼ——（笑つて）もうすつかり出来てゐるよ。

ビビ——（慥しく）あなたの平氣なのにはあきれてしまふわ。

沈黙。彼、ラケットを弄つてゐる。

彼女、足を落ちつけずに動かしてゐる。

下の道を自働車が走つて行く。

ジョゼ——（五分の後）ね、お前知つてゐる？

ビビ——えー

ジョゼ——昨日スコットランドのチームが来たのを……。

ビビ——何のチームなの？

ジョゼ——サアド・ラナーク……。

ビビ——出ることが出来ないでつまらなくはなくて？

ジョゼ——つまらないとも。ほかあゴールキーパーだつたんだからなあ。」

ビビ——では行きなさいよ。

ジョゼ——行けないもの。

ビビ——何故なの？

ジョゼ——何故だつて、その前の晩結婚するんぢやないか。

ビビ——でも結婚とフットボールと何の関係があるんでせう……。

ジョゼ——大いにあるさ。ぼくが結婚すれば、お前の側にゐなけりやならないだらう、そこに

関係があるぢやないか。

ビビ——でも誰があなたに私の側にゐて下さいつて言ひましたの？

ジョゼ——しかしそりや習慣だよ。

ビビ——でも私あなたがいつも家に引つこんでゐらつしやるのはいやだわ。

ジョゼ——いや？

ビビ——えー。

ジョゼ——ぢや引つこんでゐるのはやめようよ。

ビビ——毎日外へ出て下さいな。

ジョゼ——よいとも。

ビビ——そして私もね。

ジョゼ——構はないよ。

ビビ——ほんとの自由だわ。

ジョゼ——相互の自由だね。

ビビ——いくらお互に好きでも一生こびりついて暮す必要もないわね。

ジョゼ——勿論！

ビビ——自分のことは自分の勝手にね。



ジョゼ——その通り。

ビビ——束縛されるため結婚なんかしませんわ。

ジョゼ——勿論！

ビビ——自由を求めるために結婚するんだわ。

ジョゼ——さうだとも。

ビビ——旅行するためにもよ。

ジョゼ——さうだ。

ビビ——「生活」するためにもよ。

ジョゼ——本當だ。

ビビ——そしてあなたもさうでせう？

ジョゼ——さうだ。

ビビ——そして私の着物に對して兎や角言はないことも御承知ね。

ジョゼ——承知だよ。

ビビ——ですから、私の好きなやうに着物が着れるわ。

ジョゼ——勿論！

ビビ——そして短いスカートを穿くことも……。

ジョゼ——膝までも短い奴をね。

ビビ——そして一週に一度はお友達を呼ぶことも……。

ジョゼ——二度でもいゝや。

ビビ——そして私がお友達を招ぶ時にはあなたは家にゐないのよ。

ジョゼ——ゐないでもいゝよ。

ビビ——私のお友達は私のもので、あなたのではないからね。

ジョゼ——さうだ。

ビビ——私達の生活はお互に説明をしないことにしませうよ。

ジョゼ——うむ。

ビビ——そしてなるだけお互に面倒をかけないことも。

ジョゼ——うむ。

ビビ——そして私が厭な時にはあなたは私に接吻しないことね。

ジョゼ——うむ。

ビビ——そして嫉妬のドラマを演じないことね。  
ジョゼ——うむ。

ビビ——（相手の平氣さに焦立って）あなたは「うむ」だの「勿論」だのとしか返事しないのね。  
ジョゼ——お前を怒らせないやうにするのは難かしいなあ。

ビビ——（活潑に）でも私、怒つてゐたいのよ。  
ジョゼ——さうか、それぢや怒らしてやらう。

ビビ——あなたは私の神経を悪くするわ。

再び沈黙。彼女、背を向ける。

彼、無感覺の様子でラケットを弄ぶ。

海岸の瑞西式の別荘は、金色の斑點のやうに煌めいてゐる。

孔雀の聲がいつこかに聞える。

ジョゼ——（十分の後）ビビ、こつちをごらんよ。

ビビ——何んですの？

ジョゼ——お前が言つた事はみんな眞面目なのかえ。

ビビ——眞面目ですとも。

ジョゼ——屹度？

ビビ——屹度よ。

ジョゼ——お前が言つたやうでありたいかえ？

ビビ——さうありたいわ。

ジョゼ——本當の自由？

ビビ——本當の自由よ。

ジョゼ——そして嫉妬なく？

ビビ——えゝ、嫉妬なく。

ジョゼ——よく考へてごらんよ。

ビビ——もうよく考へたわ。私はね、うるさい思ひをするために結婚なんかしませんよ、自分を自由にするためなんです。

ジョゼ——そんなことあきまつてゐるよ。

ビビ——もうさう定まつたんだわね。

ジョゼ——さうだよ。お前は本當に理想的な花嫁だ。

ビビ——（氣を轉じて）ではテニスでもやりませうか？

二人して笑ひながら階段を下りる。

十五日の後。ビビの里方の家、ルイ十五世時代式の部屋、ジエモン會社製の麥藁色がかつた黄色の家具で飾られてある。

ビビ、今來たばかり、母の手にすがり、悲し氣に、血色悪く、泣き出しさうな顔。

二人とも接吻して話し始める。

母——一體どうしたといふんです？

ビビ——何でもないのです。

母——でも、なぜ泣いてゐるのです？

ビビ——知りません。

母——幸福でないからなの？

ビビ——え、さうです。

母——どうしてさうなんです？

ビビ——私、不幸だからです。

母——お前、勝手に結婚したんぢやありませんか。

ビビ——え。

母——それだのにお前の夫が嫌ひなのかえ？

ビビ——いゝえ、私あの人は好きです。

母——ではどうして幸福でないのです？

ビビ——でもあの人が私を愛さないのですもの。

母——まあ、何といふ事でせう！

ビビ——愛してくれないんです。

母——あれは物に頓着しない性質だからね。

ビビ——（激して）愛して呉れないんです。

母——といふのはどういふ理由です？

ビビ——ちつとも家にゐないんです。

母——ただそれだけの理由からかえ？

ビビ——そして、毎日私を一人ぼつちにしてしまふんです。

母——仕事があるからなんでせう。

ビビ——窮屈な思をするために結婚したんぢやないつて言つてゐました。

母——そりやさうでせう。

ビビ——自分のしてゐる事を話して呉れないのです。

母——男ですもの。

ビビ——（涙にぬれて）私に接吻しない日が幾日もあるんです。

母——さう？

ビビ——ですから、私、嫉妬心が起きるのです。

母——（笑つて）ほゝ。

ビビ——何故、お笑ひになるんです？

母——結婚がお前を本當に女らしくしましたよ。

ビビ——？

母——お前の性質は随分變りましたね！

黒色の男道化者と  
桃色の女道化者

ベニス町の夕暮、運河は陽の餘光に輝いて、金色の剪儀細工のやうである。黒い運河の水の上を、ゴンドラが過ぎて行く。或るバルコニイの上、桃色の女道化者と黒色の男道化者（ウイレテの繪にある悲しげな道化者のやうな）とが茶卓を前にして話してゐる。

ピエレット——ピエロさん！

ピエロ——ピエレット！

ピエレット——あなたが来てくれたので嬉しいわ。

ピエロ——お前が呼ばばいつだつて来るよ。

ピエレット——ちやうどあたしの犬のやうにね。

ピエロ——呼ばなくなつて来るよ。

ピエレット——ちやうどあたしの影法師のやうにね。だからあなたが来るとあたし慄つとするのよ。

ピエロ——どうしてぼくが影法師なのだえ？

ピエレット——悲しげな顔をしてゐるからよ……。ねえ、あんた……。

ピエロ——何だい？

ピエレット——あたし幾歳だか知つてゐて？

ピエロ——知つてゐるさ。お前は桃色だらう、そしてピエレットといふんぢやないか。

ピエレット——十五よ。

ピエロ——人生の春だね。

ピエレット——いゝえ、永劫なのよ、あたし一つの秘密を話したいと思ふの。

ピエロ——道化者の秘密かえ？

ピエレット——あたしの秘密よ。何だかわかつて？

ピエロ——誰だつて知つてゐるさ。

ピエレット——誰から聞いたの？

ピエロ——そりや十五になつたすべての少女が持つてゐる秘密だよ。

ピエレット——香水の罎の中に生きてゐる秘密よ。

ピエロ——蜜柑の樹に花が咲いた譯だな。

ピエレット——あたしの白粉の箱に入つちまうやうな小さい秘密よ。」

ピエロ——道理で、お前の顔が赤くならないのだな。

ピエレット——わかつて？

ピエロ——言つてごらんよ。

ピエレット——あたしを愛してゐる人があるのよ。

ピエロ——そりやこのほくだよ。

ピエレット——あんた？ 違ふわ、あんたは悲しい顔で黒い着物を着てゐるんですもの。あん

たはあたしの兄さんよ、あんたはあまりしやべらないんですもの……。

ピエロ——ではほくのやうに、おまへが好きな者は誰もゐないよ。

ピエレット——そんなことを言つちや嫌だつてもう言つたぢやないの。

ピエロ——木の上で鳥が歌つたからつて、その木に罪があるものか！

ピエレット——あんたは道化者の事について聞いたことがあつて？

ピエロ——あるさ、ありや面白いよ、ギターを持ち、色々な色で彩つた帽子を被つて……。

ピエレット——ね、あの人よ。

ピエロ——通りがかりの正體の知れない者には氣をつけな。

ピエレット——何故なの？

ピエロ——あいつの後を随まいて行く女はみんな墮落してゐるからね。

ピエレット——でもちつとも恐くはないわ。

ピエロ——道化者は誘惑者だよ。

ピエレット——でもあの微笑ほほえみはなんていゝんでせう。

ピエロ——道化者は嘘つきだよ。

ピエレット——でも、なんて歌ふのが上手うまいでせう。

ピエロ——道化者は不義者だよ。

ピエレット——でも、あのマントは何んとあたしの心を惹くことでせう。

ピエロ——ピエレット！ お前はお陽ひさまを見た事がなかつたかえ？

ピエレット——一度あつたわ、そしたら光があまり強すぎて、眼に涙が出たわ。

ピエロ——注意しな。もう二度と泣いちゃ駄目だよ。道化者も外観と實際と異ちがふあの太陽のやうなものさ。

ピエレット——あなたはあの道化者があなたのやうに悲し気で黒色であつたらいいと思ふの？

ピエロ——ゴンドラもまた黒いよ、そしてゴンドラを漕ぐ人もまた歌つてゐるよ。

ピエレット——ピエロさん！　あたしはまだあなたに秘密を話さなかつたわね。

ピエロ——お前の眼は光つてゐるよ。お前はもうしたの？

ピエレット——あなたの手をこつちへよこしてよ！

ピエロ——お前の手は震へてゐるね。

ピエレット——あたし、本當のことを言ひたいわ。

ピエロ——それは本當に心から出た言葉かえ？　よく女は嘘を言ふものだからね。

ピエレット——あたしあなたに深切でありたいと思ふのよ。

ピエロ——お前のその微笑は本當の心からのものかしら。よく女は人を瞞すものだからなあ。

ピエレット——あたし、今夜驅落ちしようと思ふのよ。

ピエロ——あの男とかえ？

ピエレット——ええ、あの男とよ。

ピエロ——あゝ、可愛相だなあ、お前は……。

ピエレット——サンマルコ寺院の鐘が十二時を打つ時……。

ピエロ——神様がお前を桃色にして下さつたのはお前に花のやうな運命を下さるためだつただよ。

ピエレット——あの人はあたしに夢中になつてゐるのよ。

ピエロ——では何處へ驅け落ちするの？

ピエレット——何處でも幸福のあるところへ。

ピエロ——幸福は自分自身で持つて行かなきや何處へ行つたつてありやしないよ。

ピエレット——あたし戀してゐるのだから、幸福はあたし自身で持つて行くわ。

ピエロ——しかし戀なんていふものは決して人を幸福になんかしやしないよ。

ピエレット——だつてあの人はあたしを夢中に戀してゐるんですもの。

ピエロ——お前は本當に可愛相だよ。

ピエレット——かまはないことよ。でも、あたし自分で幸福だと思ふわ。

ピエロ——どの位の間？

ピエレット——永久に……。戀は永久だといふことは本當ぢやないの？



ビエロ——戀は咲いた日に凋む花のやうなものだよ。

ビエレット——戀は深いといふことは本當ぢやないの？

ビエロ——深いと言つたつて、それは壊れた鏡のやうで、果敢ないものさ。

ビエレット——でも戀は愉快なものだといふ事、これだけは少くとも本當ぢやないの？

ビエロ——その愉快さは死ぬために歌ふ白鳥が味はふ愉快さと同じやうなものさ。

ビエレット——では戀が永久でなく、深くもなく、愉快でもないのなら、何のために人々は戀をするのかしら……。

ビエロ——苦しむためにさ、ちやうどぼくのやうにね。

ビエレット——それであんたは苦しむのが良いと思ふの？

ビエロ——ぼくはお前のために苦しむのなら愉快だ。

ビエレット——戀をすると誰も苦しいの？

ビエロ——さうだよ。ね、ビエレット——ぼくの方をこらんよ、そら、ぼくの顔の涙が見えるだらう？ これを見るとお前は明日<sup>あした</sup>屹度苦しくなるよ。この涙はこの世に同じ感情を持つてゐる人が二人とないといふ苦しみなのだよ。この涙は、一人は非常に愛してゐてもその相手

はあまり愛さない、そのための愛の苦しみなのだよ。この涙は嫉妬と嫌悪との苦しみなのだよ、それは人を熱愛し、しかも相手が影のやうに逃げて行くのを感じる時の涙なのだよ。苦しみを訴へてもきかれず、熱愛して、跳ねつけられた涙なのだよ。

死ぬほどの涙で、我々を殺した手に薔薇の花を<sup>さいな</sup>虐んでのせたやうなものだ。ね、ビエレット——お前は戀の中に接吻のやうに果敢ない無限の眩惑のほかを求めてはいけないよ。残るものは苦悶と自暴自棄と悲哀だけなのだからね。

お前が苦しきまうとするのは卑しい戀慕、煩悶、苦痛を伴ふ肉體的の快樂、そんなものばかりだよ。

あゝ、ビエレット——お前は可愛相だ。

ビエレット——あゝ。でも、戀することはどんなに良いでせう！

ビエロ——戀を知つたらお前は屹度苦しむだらうよ。

ビエレット——でも戀つてどんなに美しいものでせう。

ビエロ——戀を覺えたらお前は屹度ぼくを想ひ出すことだらう。」

ビエレット——あたしは屹度あの人が好きになるですう。

ピエロ——愛されて、その上、賤しめられる、それが女の運命なんだよ。

ピエレット——香を發散して微笑<sup>ほくそ</sup>む、それが花の運命なんだわ。

ピエロ——お前はあの男のために苦しめられるだらうよ。

ピエレット——そしてあたしはあの人に接吻するんだわ。

ピエロ——あの男はお前を棄ててしまふだらうよ。

ピエレット——あたしはそれでもあの人を愛してゐるわ。

ピエロ——そしてあの人はお前を苦しめて殺してしまうだらう。

ピエレット——あたしはそれでもあの人を祝福するわ。

ピエロ——お前は勝手にお前の運命に従へよ！　ちや、さよなら。ピエレット！

ピエレット——さようなら。ピエロさん！

## 仕へる事

××男爵家の喫煙室。朝食の後、男爵外出する。

男爵夫人、成り上りのやうな風采、乾燥無味、無愛想、不快な感じを與へるやうな性質、枯れ葉色の外套を身に着け、瑞西皮の縁なし帽を被り、大きな長手袋を穿め、馬車の來るのを待つてゐる。

戸口に下男が現はれる。老人で、もとのルーレ侯爵家の食堂ボーイ。

下男——奥様！

夫人——何です？

下男——外に一人の御婦人が來てゐらつしやいますが。

夫人——さつき今日は誰にも面會しないつて言つて置いたちやありませんか。

下男——あの御婦人が、家政婦入用の廣告をお出しになつたのはこちら様ですかつて尋ねられましたか……。

夫人——面倒ね、ではお入れ申しなさい。

下男——この部屋へですか？

夫人——ええ。

一人の瘠せた若い婦人が入つて來る。

金髪、氣高く、氣苦勞をしたらしい風貌、黒の着物、黒の縁なし帽。これが未來の家政婦である。

頭で一寸挨拶をして後、立つたまま言葉を待つてゐる。

夫人——あなたはあの廣告の條件に適つたお方ですか？

家政婦——はい、さう信じますが。

夫人——お幾歳です？

家政婦——二十七でございます。

夫人——それよりも老けてお見えですわね。

家政婦——随分苦勞をしたものですから。

夫人——病氣なのですか？

仕へる事

家政婦——いゝえ、精神的の苦しみの結果なのです。

夫人——うちで今何が入用なのか御存じですか？

家政婦——家政婦です。お女中方の監督をする……。

夫人——して殊に子供の面倒も見るとは……。

家政婦——そんな事にはよく慣れて居ります。

夫人——私の家には乳母と馭者とを入れて八人の召使が居るんです。

家政婦——馬丁を入れて九人と新聞で拜見しましたが……。

夫人——さうです、そして給料は二十ミルレイスですよ、それでもようございませうか？

家政婦——はい、十分でございます。

夫人——今迄どこに仕へてゐらしたのですか？

家政婦——どこにも仕へてゐませんでした。

夫人——ではどこにも御奉公なさらなかつたんですね。

家政婦——私の家に居りましたのです。

夫人——あなたの御両親の？

家政婦——いゝえ、両親はずつと以前に亡くなりました。

夫人——うちで入用なのは経験のある家政婦でなければ駄目なのですが……。

家政婦——家政婦の仕事はよく存じて居ります。私も下男を使つた事がございますから……。

夫人——一番にいらしても、見ず知らずのお方は雇ひかねるのですが……。

家政婦——ご尤もつともでせうけれど……。

夫人——生れや、これ迄の履歴なども知る必要がありませんものね。

家政婦——必要でございますなら、いくらでも申しあげます。

夫人——何ですつて、どこへも御奉公なすつた経験もありませんのに？

家政婦——私をご存じの人達を申しあげるので。

夫人——それは別の事ぢやありませんか。

家政婦——それも人に依りますと思ひますが。

夫人——ではその人達のお名前は何？

家政婦——先づ、アベニダ・リベルダーデ六十四番地のモンテ・ベルデ夫人……。

夫人——（書き取つて）そのお方があなたを保護なさるんですね。

家政婦——その方の姪にあたる方に英語を教へた事がございますので。

夫人——外国語がお出来なんですね。

家政婦——英國に三年ばかり居りましたから。

夫人——それから、そのほかに御知り合の方といふのは？

家政婦——オヂベラスのカストロ大將です。

夫人——その方はあなたの御親戚ですか？

家政婦——私の子供の名附親なのです。

夫人——えつ？ あなた、お子さんがおありになるんですか？

家政婦——はい、五つになるのがございます。

夫人——もうお話しする必要がありません。そんな方は不向ですから……。

家政婦——でも私の子供をこちら様へ連れて來ようなどと思つては居りません。

夫人——それでも駄目です。

家政婦——子供は月月の仕送りをして、親類の家へ預かつて貰はうと思つて居ります。

夫人——でもさういふお方は不向です。

家政婦——しかしどうして私の子供がこの契約に邪魔になるのでせう。

夫人——こんなことでは私の子供をあなたにお委せする事が出来ないといふ事位おわかりでせう。

家政婦——よくはわかりかねますが。

夫人——私は子供の教育をそんな浮氣をした方に依頼することは出来ないのです。

家政婦——その子供は私と夫との間に生れたのです。私は結婚したのですから。

夫人——それでもそれだけではあなたの辯明は十分ではないと思ひますが。

家政婦——でも私の結婚證明書を持つて來る程の必要もないと思ひます。

夫人——それではあなたの旦那はあなたが御奉公されることに賛成なされたんですか？

家政婦——夫は私と一緒に住んで居りません。

夫人——では誰と住んでゐらつしやるんですか。

家政婦——多分アルヘンチナにゐることと思ひます。

夫人——ではよく御存じないのでせう。

家政婦——私、捨てられてしまつたのです。

夫人——當然のことです。多分他の女と住んで居られる事でせう。」  
家政婦——私、知りません。

夫人——手切金も下さらないであなたを捨てたのですの？  
家政婦——その上、一人の子供まで残して……。

夫人——何故あなたは離婚を請求なされなかつたのです。

家政婦——それは私の宗教上の主義に悖りますから……。

夫人——あなたの旦那のお名前は何と仰言るのですか？

家政婦——（悲しげな微笑をして）そんなことがこの契約に是非必要といふのでないのですから、どうぞ……。

夫人——では、あなたのお名前は？

家政婦——マリヤ・イザベルと申します。

夫人——それだけですか？

家政婦——マリヤ・イザベル・ド・アルプケルケ・アマラルです。

夫人——何處のお生れのですの？

家政婦——ビゼウです。

夫人——ではきつと、カザ・ドアルコ・アルプケルケ家と親戚関係でもおありなんでせうね。  
家政婦——あるでせうと思ひます。

夫人——あの一家には随分妾腹がありましたつけね……。もう宜しうございます。うちではあなたのやうなお方に、して貰ふ仕事はありませんから……。うちでいるのは附添婦人ではないのです。うちでいるのは女中代用の家政婦なのです。

家政婦——でも私何の御用でも致しますから。

夫人——女中代りでも構ひませんか？

家政婦——何でも構ひません。

夫人——ではあなたが教育あるにせよ、生活様式が變つてゐるにせよ、私の家では別に特別な扱ひは致しませんから、そのお心算こころざしりで居られなければなりません。  
家政婦——はい、よく存じて居ります。

夫人——またすべての點で、他の女中と同様、一人の女中として扱ふのですから、それでも構ひませんか？

家政婦——はい、構ひません。

夫人——そしてまた、家族のものともあまり馴れ／＼しくすることのないやうにして貰ひたいのです。

家政婦——私の仕事の範囲はよく覚えて居ります。

夫人——前掛と頭巾はいつもつけてゐなければなりませんよ。

家政婦——はい。

夫人——食事の時も女中や下男と一緒に食べるのは無論ですよ。

家政婦——はい。

夫人——そしてあなたを訪ねて来るお客なんぞ寄せつけないやうにしてね。

家政婦——でも、それはどうしてなのでせう？

夫人——あなたのお子さんはここへ来させないやうにして下さい。私の子供と一緒に遊ばして置くのはあまり良いこととは思ひませんから。

家政婦——（顔に涙が滲む）お暇が出れば十五日十五日に私の子供に會ひに行きませう。

下男——（戸口に現はれて）奥様！ 馬車が来て居ります。

夫人——あ、さう。では今日あなたの身元などを調べさせませう。明日もう一度いらつしやい

（戸口を出ながら）アントニオ！ このお方をお送りしなさい！

家政婦——（老僕の腕に支へられて、嘔り泣きながら）あゝ！

下男——ね、勤める事は悲しい事ですよ。

蜜

月



二人の新婚者の更衣室。

彼女、十八歳、金髪、活潑、英國婦人風の一時的の美人、一冊の本を懐中し、手に銀製の小さい鏡を持つて、安樂椅子に腰を下してゐる。

彼、三十五歳、丈高く、黒い眼、頭髮の末端少しく白味を帯ぶ。帽子を被り、モーニングコートを着け、手に外套を持つて、入つて来る。

彼——あの黄色い手袋は？

彼女——あなたお出かけ？

彼——うむ。

彼女——では私を一人ぼつちにしてしまふの？

彼——すぐ歸つて来るよ。

彼女——何處へいらつしやるの？

彼——アメリカ公使館へ行つて来る。

彼女——アメリカ公使館へ何をしにいらつしやるの？

彼——では僕が聞くが、お前は友達の家へ何しに行くのかね？

彼女——そりやまた別問題ですわ。

彼——同じことさ、さあ手袋をお出しよ。

彼女——私、あなたの女中ぢやありませんわ。

彼——ぢや、どこにあるのかお言ひよ。

彼女——何のために手袋が入用なの？

彼——勿論はめるためさ。

彼女——何處へも行かなくつたつていゝぢやないの。

彼——する事があるからよ。

彼女——する事があるつて何ですの？

彼——ぼくの義務よ。

彼女——あなたの義務は私の側にゐることぢやないの。

彼——（接吻するため彼女の方へ身を屈し）では行つて来るからね。

彼女——（頭から彼の帽子をとつて）行つちや駄目です、私が離しませんわ。

彼——困るなあ。帽子をお出しよ。

彼女——婦人の前で帽子を被る人なんかいないことよ。

彼——お前はただの婦人ぢやないよ、ぼくの妻ぢやないか。

彼女——失禮なこと……。

彼——お前ばかりだよ、そんな事を言ふのは……。

彼女——あなたは他人の奥さん**（おと）**にばかり禮儀正しいのだから……。アメリカ公使館へ今日誰が来るんです？

彼——知らないよ。

彼女——あのベルギー女が来るんでせう、あなたが好きとか仰言つた……。

彼——そんな奴なんか居やしない。

彼女——お氣の毒さま。

彼——お前は氣がどうかしてゐるぜ。

彼女——何時でせう？

彼——九時半だよ。

彼女——もう少し私の側にゐて頂戴な、もう半時間ばかり、十時迄ね。

彼——（腰を掛けながら）ねえ、お前の言ふ事を怒らずに耐へてゐるのは實際骨が折れるよ。

彼女——怒つてゐるの？ 怒つてゐるのなら、さあ行つちやつて下さいよ。

彼——もうぼくは嫌になつちやつたよ、お前が鏡ばかり見てゐるのを見るとね。

彼女——私自分が美しいと思ふから見るのよ。

彼——ぼくもさう思ふがね。

彼女——でも私の事をちつとも構つて下さらないぢやないの、そして私が接吻して下さいと言つてもして下さらないぢやないの？

彼——だつてぼくが出来ない時お前が接吻して呉れと言ふからよ。

彼女——どうして接吻する事が出来ないの？

彼——どうしてだつて人前ぢやないか。

彼女——人前がどうしたと言ふんです、私はあなたと結婚した者ぢやありませんか。

彼——さうかと言つて、無理に隠れて接吻するなんてそれも滑稽だからね。

彼女——私達の婚約時代には、あなたは接吻ばかりして下さつたのに……。

彼——婚約時代には馬鹿氣た事ばかりやるものさ。その内でも一番の馬鹿氣た事は結婚することなんだ。

彼女——あなたはこの結婚に満足してはゐらつしやらないの？ それならとつくに離縁しちやつたんですのに。

彼——いや、ぼくはもう満々足だよ。

彼女——（極度に優しい嬌態をして）あなたは本當に悪魔ですわね、でも私あなたが本當に好きなのよ（接吻する）

彼——駄目だね、ぼくを白粉だらけにしちやつたよ。

彼女——いゝぢやありませんか、あなたは私の物ですもの。

彼——ぼくはお前の物だ、けれどもこんなに桃色の白粉を顔一面になすつて外へ出たくないよ。

彼女——誰もそんな事を非難する権利はないわ、あなたは私のほか誰のものでもないんですもの。

彼——（彼女の拘擁から離れて）一寸煙草に火をつけさせてお呉れよ。

彼女——（彼の口から煙草を取って）喫つちや駄目です、私と話でもして、ね？

彼——それぢやぼくは唯お前の好きなやうになつてゐなけりやならんのかい？

彼女——今日は何だか知つてゐて？

彼——知らないね。

彼女——でも知つてゐらつしやらない筈はないと思ふわ。

彼——ぼくは日なんて何日だか覚えてゐないよ。

彼女——それがあなたが私を構つて下さらない證據よ。

彼——日を覚えてゐることと結婚と何か關係でもあるのかえ？

彼女——えゝ、關係が大ありよ、今日は私達が結婚して百三十二日ですわ。

彼——そして明日は百三十三日目、明後日は百三十四日目……。

彼女——もういや、そんなことを言ふのはやめにして下さい。

彼——お前はぼく等の結婚生活を毎日祝福してゐないらしいね。

彼女——思つてゐないどころですか、大に祝福してゐるのですわ。

彼——毎日？

彼女——ですから今日もあなたに贈物を買つたのよ。

彼——贈物？

彼女——ええ、あなたから貰ふための贈物。

彼——さうか、有難い、お前は實に氣がつくよ。

彼女——何だか知つて？

彼——知らない。

彼女——レースで編んだ日傘よ、アレンソン會社製の、(彼に見せながら)よくつて？

彼——だが何のため使ふんだえ？

彼女——日傘は何のために使ふんですつて？ 陽があたらないうやうにするためですとも。

彼——レースの日傘ぢやさぞよく陽が防げるだらうよ！

彼女——それが流行なのよ。

彼——流行だらうよ。けれどもそんなものは何の役にも立たないね。

彼女——みんなは役に立たぬからこそ使ふのよ、わかつて？

彼——さうだらう？！

彼女——私の言ふ事面白くなくつて？

彼——(新聞を開けて)非常に面白いね。

彼女——非常に面白い？ それなのに新聞を見てそらつとぼけるの？

彼——なにちよつと素通しに讀むだけさ。

彼女——あなた新聞を讀まない方がいゝわ。

彼——お前は、ぼくが煙草を喫<sup>+</sup>つちやいけない、新聞を讀んぢやいけないと言ふ、そんなら一體ぼくは何をすればいゝんだね、お言ひよ。

彼女——あなたに私の方を見てゐて貰ひたいのよ。

彼——そりや面白い。

彼女——面白い筈はないと思ふわ、何故ならあなたはもう私を大事に思つてゐらつしやらない

んですもの。

彼——お前を大事に思つてゐるさ。ぼくはお前が好きだ。お前を熱愛する。だがぼくはお前を

見つめるために生涯を送るんぢやない事はお前も知つてゐるだらうね。さあ新聞をお寄越

し！

彼女——では私は何をするの？

彼——ほかのをお読みよ。

彼女——ほかのなんかありませんわ。

彼——ちや讀まないまでさ。

彼女——あなただけ讀むの？

彼——お前もお讀みよ。

彼女——私、うるさい？

彼——うるさいさ。

彼女——（彼の頭へ顔を凭らせて讀む）ほら！ ギーダが結婚したんだわ、あのグランヂヤ事件

以來ギーダに結婚が出来ると思像した人があつたでせうか？……。ね、本當の事を言つて下

さいよ、あなたはあの人が好きだつたの？

彼——ぼくは好かなかつた。

彼女——ちやあの女おんなはあなたを好いてたの？

彼——どうか。

彼女——でもあなたはあの人と結婚すれば屹度私と結婚したやうに幸福ではなかつたと思ひま

すわ、さうちやなくて？

彼——ねえ、もう新聞はゆつくり讀んだらう。

彼女——あなた方男の幸福も矢つ張り新聞をゆつくり讀むことなんだわねえ。

彼——ぼくにとつては、幸福とは靜かにしてゐられる事なんだ。

彼女——靜かにして暮したい人は十八位のお轉婆女とは結婚なんかしないものですわ。

彼——だからぼくは早くお前が年寄になればいゝと思つてゐるんだよ。

彼女——まあ、馬鹿氣たことを……。

彼——もう十時だ。

彼女——接吻してよ。

彼——あゝ、お待ち。アメリカ公使館へ行くのは明日にしよう。

彼女——ではお茶にしたらどうでせう？

彼——さうだ、お茶でも飲みませうかねとくるんだね……。

三分間のドラマ

英國風の書齋。ゴードン産のステンドグラスの附いた虹形の窓。本や紙が不規律に一面に置かれた広い机。ボロニア産の陶器の中には花が挿され、側には電話器がある。パソ・デ・ソウザ子爵、四十歳、華美、灰色の髪、脂氣のないキリツとした顔、安樂椅子に腰を据ゑて雑誌の頁を繰つてゐる。

夫人、金髪、沈み勝ち、バルザックの『三十女』に出て来るやうな風采、外出するため水色のカシヤの輕装、腕を露はにして出て来る。

子爵——外出するの？

夫人——はい。

子爵——自動車呼びにやつたかえ？

夫人——自動車は不用ないつて仰言ひやしませんでしたかしら。

子爵——銀行へ行かなきゃならないんだ。お前と一緒に往かうぢやないか？

夫人——私、自動車は不用ませんの、一廻り歩いて来るのですから。

子爵——歩いて？ そんなに腕を露はにしてかえ？

夫人——でも流行なんですから私に罪はありませんわ。

子爵——流行もことに依りけりでね、まあそれでいゝかも知れんが、少くともあの手袋は持つてお出よ。

夫人——この暑さにはですか？（接吻するため彼に手を出す）では行つて参ります。

子爵——（引き留めて）どこへ行くの？

夫人——病氣で寝てゐるギードを見舞に行くため花を買ひにです。それから序にあの近くのフランス公使館へ名刺を置いて來ようと思ふのですがね、あなたのも置いて参りませうか？

子爵——ぢや置いて來て貰はう。（彼女の手を見て）お前こんな指環があつたのかえ？ ちつとも知らなかつたよ。

夫人——これはお母様のですわ、あなたはもう見飽きてゐらつしやる筈ですのに。

子爵——さうだつたかなあ、（ベルのボタンを押して）一緒に出ようぢやないか、今自動車を呼びにやるよ。

夫人——いゝえ、面倒ですから、私、歩いて行きますわ。

子爵——ぢや、勝手におし。

夫人——行つて参ります。

子爵——行つておいで。

下男——（夫人が外出して間もなく入つて来る）御前様、お呼びになりましたか？

子爵——（楓の長椅子に腰を下して本を讀みだす）いや、別に用はないよ。

或る立派な洋服屋の窓口。二人の青年が通行人の話をしてゐる。

アホンゾ、二十歳、英國かぶれ、無髯、子供らしい性質、金の腕時計をはめ、阿彌陀に麥藁帽を被つてゐる。

バラダス、油ぎつたでつぶりした體格、早くも頭が禿げかかり、眠れる豚のやうな風體。

シアド街、陽は金色に光つてゐる。七時頃。

バラダス——して蹴球の勝負はいつなんだい？

アホンゾ——來週だよ、ぼく達のチームは實に偉大だぜ、何しろ猛者が揃つてゐるからね。

バラダス——ゴールキーパーは誰だい？

アホンゾ——ぼくだよ。……煙草を一本呉れ！ 今日僕は白いズボンを誂へに來たんだ。（店の中のを呼ぶ）おい、アマロ！ このズボンは一コントもするから一寸耐へるよ。

バラダス——あそこを通る女は金持らしいね、きみ知つてゐるかえ？

アホンゾ——何處だい？

バラダス——あそこだよ、水色の着物を着て、腕を裸にしてゐる女だよ、ありや屹度ベルギー人だぜ。

アホンゾ——あれか、あれはバツ・デ・ソウザ夫人らしいな。

バラダス——おや、ルベンだぜ。

アホンゾ——バツ・デ・ソウザ夫人だよ。きみは知らないのか？

バラダス——あのハスバンドは知つてゐるよ。

アホンゾ——夫だけ知つてたつて駄目だよ。

バラダス——ほかあ矢つ張り金髪女の方がいいな。一寸見ろよ、あの皮膚を。そしてあの足の歩く調子つたら實にいゝね。



アホンゾ——戀するには金髪に限るよ、金髪は二人の褐色髪に價するつて、誰かが言つたつけ……。ぼくはよく彼女とテニスをやつたものだよ、あの祖母はたしか英國人だつけ。

バラダス——のろけるなよ。

アホンゾ——煩せえなあ。彼女は品行が良いよ、あれの夫は何しろ運の良い奴だ。だから尙のこと彼奴をどうにかしてやんなくちや承知出来ないよ。

バラダス——一體、あのハスはきみに對して何をしたんだえ？

アホンゾ——何をしたかつて？ 銀行で僕を首にしたのは彼奴だよ、あの時はひどい目に逢はしてやらうと思つたよ。

バラダス——そりやむづかしいぜ、何しろあの人は腕つ節が強いからな。

アホンゾ——なあに、僕だつて六年もボキシングを習つたんだ、あの子爵の野郎が女の嫉妬でやきもきした生活をしてゐるのが、實にいい氣味だと思ふよ。

バラダス——あの女は何處へ行くんだらう。

アホンゾ——家へ歸るんだらう、子爵夫妻はシヤガス通りに住んでゐるからね、(店の中の者を呼ぶ)アマーロー！ 電話があるかい？

アマーロー——その左側にあります。

バラダス——何するんだい、君？

アホンゾ——あの子爵の奴を嚇かしてやるんだ。

バラダス——用心しろ、聲で君だといふ事をさとられるぞ。

アホンゾ——妻君が今家へ歸つて行く事を知らせ、彼女が何處へ行つたか聞くのを忘れるなつて言つてやらうと思ふんだ。

バラダス——うまくやれよ、あの人は危険性を帯びてゐるので下手に行くといひどい目に逢ふから……。

アホンゾ——なに、大丈夫だ。(電話口に) セントラル七六九五番！

數分の後。パソ・デ・ソウザ子爵家。

虹形窓の硝子の赤色が机や床の上に射影してゐる。

椅子がころげて、紙片が床の上一面に擴がつてゐる。

子爵——（青ざめ、手を震はせ、電話口に立つてゐる）あなたはどちらですか？ は、え、番号は何番ですか？ 電話番号を言つて下さい、え？ 知らないつて？ ちやどこと話してゐるのかわかりやしない、もういゝ、（受話器を置いて）なんだ悪戯だな。（再び電話口に昂奮して立ち）ノルテ七二二番！ もしもし、ギーダですか？ は、私だよ。お前の處へアリスが行かなかつたかね？ 行かない？ 本當かえ？ さうか、ではさよなら。（電話を切つて再び他へかける）もしもし、フランス公使館へつないでくれないか……。もしもし、フランス公使館ですか？ あなたの處へパソ・デ・ソウザ夫人が行きませんでしたでせうか？ 行きません？ 有難う。（足音が聞えたので受話器を置きベルを鳴らす、下男が現はれる）今入つて来たのはアリスかね？ ここへ来るやうに言つてお呉れ。

夫人——（微笑して現はれる）私、花は見つかりませんでしたわ。

子爵——お前、何處へ行つて来たんだ？

夫人——え？ あなた、どうかたすつたんですか？

子爵——何でもいゝ、さあ、どこから今来たのか言ひな。

夫人——ギーダの家からです。

子爵——嘘を言へ、あそこには居なかつたぢやないか。

夫人——なんです、あなた氣でもお狂ひになつたのですか？

子爵——（彼女を捉へて）一體、今どこから来たんだ。

夫人——どうぞ離して下さい。

子爵——俺の顔へ泥をなすりに何處をぶらついてゐたんだ？

夫人——（彼から離れ戸口に駆け出て）誰か来て下さい！

子爵、一挺のピストルが彼の手に閃めいてゐる。打つた音が聞える。

陶器が粉碎される。電鈴が鳴りひびく。アリスの體が戸口の闕に俯向きになつて倒れる。

子爵——（襪襪切れが落ちるやうに力なく脇掛椅子に身を落して）あゝ、彼女に若し罪がなかつたらどうしよう！

錯  
亂  
者

××伯爵家。夜一時半頃。

伯爵、五十歳、灰色の髪、立派な風格、外套の襟を立てて、伯爵夫人の部屋を叩く。夫人、眼を光らせ、顔に皺を寄せ、不安さうな蒼ざめた顔をしてゐる。沈黙。

部屋の壁には青い大きなアライオロス織の壁掛がかけられてゐる。

彼——エレナや！

女の聲——どなたです。

彼——私だよ。

女の聲——何の御用です？

彼——お願いだから、開けて呉れないか？

女の聲——もう私、寝てしまつたのです。

彼——お前に話さなけりやならない事があるんだから。  
女の聲——ちよつと待つて下さい。

二分の後、戸が開かれ、二人とも見るともなく見合ふ。

彼女、白の寝間着、半裸の腕が薔薇色に反射する。金髪の女。

彼——エレナかえ？

彼女——何か御用なのですか？

彼——今夜、お前の部屋にゐさしてお呉れ。

彼女——事もあらうに、何ですつて？ そんな願が言へる義理ですか？

彼——そりやよく知つてゐる、それだからお願いするのだよ。ね、エレナ！

彼女——駄目です。

彼——ではほんの少しの間でいゝから話をさしてお呉れ。

彼女——明日にして下さい。

彼——今日でなけりやいけないんだ。

彼女——私、少し休息しなけりやならないんです、私、病氣ですもの。

彼——かういふ苦しい時には、ぼくは母親に頼るやうにお前に頼るのだから。ね、エレナ、ぼ

くは苦しい……。

彼女——ちや、お入りなさい。

寢室。古びた薔薇色の部屋、英國風。寢臺の側に、ソファがある、そこへ彼は吸り泣き乍ら腰を下ろす。

一一〇

彼——僕は實に不幸だ。

彼女——どうしようといふのですか？

彼——僕は自分の部屋にゐるのが不安でならない。僕は自分が恐ろしくなつた。

彼女——あなたの生活振りは口にも出来ない程無茶なのですから、それを尋ねるのさへ氣が引けますわ。

彼——さうだらう、僕は狂人だつたよ。

彼女——賭博で負けたのですか？

彼——うゝむ？

彼女——お金でも入用なのですか？

彼——そんなものは一文だつて貰つた例がないぢやないか？

彼女——では何が欲しいのですか？

彼——ただお前の同情……。

彼女——私、あなたへの同情にはもう倦き倦きしてゐますわ。

彼——頭でも凭らせる事の出来る親しい人の胸があればなあ！ 僕はこんなに苦んでゐるが、

お前にはわからないのだ。

彼女——あなたを苦しめたのは私ぢやありませんから。

彼——お前は實に僕に對して寛大で善良だつたが、僕のこの生活は和げ難いものであつた。

彼女——でもその罪はあなたにありますよ。

彼——僕は多情だけれど、これは持つて生れた性質で僕の與り知らぬところだ。

彼女——あなたの生活に私の力でどうか出来るやうな不幸でもあつたのでせうか？

彼——いや、此の不幸に對しては施す術がないのだ。

彼女——では、私達はもう話し合ふ必要がありませんわ。私、もう疲れてゐますから。お休み

なやむ……。

二二六

彼——お前の部屋から追ひ出さうといふのかい？

彼女——あなたがここにゐる権利がないなどと私から意見されるやうな事がないやうにして下さう。

彼——僕はそんな権利は求めはしない。お前の心に訴へるのだ。今夜だけお願いだから、お前の部屋へ置かしてお呉れ。安樂椅子の上で澤山だ。お前の邪魔はしない。僕は獨りになるのが恐ろしいのだから……。そして誰かが側にゐると感じてゐる必要があるんだ。

彼女——それでも男一匹なのね！

彼——僕は寢臺の上へピストルを置いて來た。だから僕はもう自分の部屋へ歸るのが恐ろしいのだ。

彼女——え？　なんです、又何といふ馬鹿氣た事をなすつたのです？

彼——あゝ、お前が僕の妹で、お前の腕に抱かれて泣く事が出來たらなあ！

彼女——私はあなたの妻ぢやありませんか、さ、どんな事が起つたか言つて下さい。

彼——エレナ、お互の間の親しみといふものがすっかりなくなつてから三年になる。

彼女——そして？

彼——そして今迄表面は親しさうに一緒に暮してゐたが、僕達の心の中では本當の赤の他人だと言ふことを知らない者はない。

彼女——それから？

彼——それは僕の狂態に對しての正當の罰だつたのだよ、その罰はお前が與へ、僕が受けたんだ。けれども僕は男の持前の煩惱を取り去ることが出來なかつた。

彼女——あなたに道德觀念が缺けてゐる事は知つてゐますわ。

彼——僕達は各自勝手な生活をしてゐた、そして相互の自由を認めてゐたのだね。だから、エレナ、僕がお前以外の者に愛を移したのは當然の事だつたのだよ。

彼女——ではあなたは今時分私の部屋へ、あなたの戀人の事を話しにいらしたのですね、さうでせう？

彼——いや、僕は再び變り果てた自分の生活を話しに來たんだよ。

彼女——女性には男性が知らない自尊といふ感情があるのですよ。

彼——いや、人間の愛慾があるのみだ。

彼女——そんな話はあなたの新しい恋人達に聞いて貰つたらいいでせう。私、病氣なのですから獨りにさして下さいよ。

彼——お前は僕が今如何なる精神状態にあるか知らないのだね、知つてゐるなら僕に出て行けなんて、そんな残酷な事は言へない筈だが。

彼女——ではあなたの亂心の味方になれと仰言るんですね、あなた自身を誰だと思ひになるんです？　そして私を誰だと思ひになるんです？

彼——僕には現在お前を除いて誰もいないのだから……。

彼女——私どもは今のところ唯二人の知合であるだけぢやありませんか。

彼——二人の知合、お互は如何に離れて住まうが決して全然赤の他人にはなり得ない二人の知合だ。

彼女——あなたと一緒に住んでゐた女があなたから逃げたのでせう、屹度さうです、こんなことは聞かないでも知れる事なんです。

彼——あの女が僕を裏切つて他の男と關係したのだ。

彼女——正しい道德觀念が少しでも残つてゐたら、そんなことを言ひに来やうたつて來られる

ものではありませんわ。

彼——僕は幸福な家庭を一度も味はつた事がない。

彼女——あなたのやうな近視的の感情では決して女の歡心を買ひ、女の心を捉へる事は出来ませんわ。あなた方は女性から棄てられるため、女性から瞞されるために生れてきたやうなものですわ。

彼——エレナ、僕の感情はまだ涸渴しやしない、だから僕はまだ泣く事が出来るよ。

彼女——あなたを捨てて逃げた女達のことを思つて泣くために、この正妻の側へいらつしやつたのね……。もう言ふことはありません、あなたの人格には愈々あきれました。それなのに、私自身もあなたを自分の部屋から無理に追ひ出す勇氣がないなんて、あなたに劣らない程輕蔑すべき人間ですわね。

彼——あの女は僕に一人の子供を置いて行つてしまつた。

彼女——私はもうあなたの生活を聞きたくはありません。

彼——生れて五ヶ月ばかりの子供だ。僕が自ら蒔いた禍を贖ひに生れて來た子供だ。一寸前に、僕が彼女が他の男と一緒にゐる所へ踏み込んだ時、彼女が僕の腕に子供を投げつけて逃げて

行つたのだ。あゝ、その子供こそ僕の幸福と家族との最後の希望であつた。それが最後の家庭だつたのに永久に壊されて了つた。エレナ、その哀れな子供は僕をここ迄乗せて來た馭者の慈悲によつて彼の家にゐるのだよ。あゝ、生活の一切は僕にとつては終つて了つた。

彼女——（數分の沈黙の後、金髪の頭をあげて）門口に馬車が來てゐますの？  
彼——うむ。

彼女——では、あなたの子供を連れに行つていらつしやい……。

愛

人



ルキ十六世時代風の更衣部屋。天井と鏡の兩側に電燈が光つてゐる。夜の一時。ジョルヂ、高級賣笑婦と交際ある色男、三十五歳、立派な體、少しく灰色の髪、申分なき服を着け、長椅子に腰を下ろして手袋を弄んでゐる。彼の側にルイザ、彼を迎へるため寢臺から起きたところ。澁い黄金色のキモノに身を包み、腕を露にし、素足に絹のスリッパを穿いてゐる。

ルイザ——フランス公使館で面白うございましたか？

ジョルヂ——面白かつたね……、電燈をも少し暗くしないか。

ルイザ——どうしてです？

ジョルヂ——眼を悪くするよ（ルイザ、鏡の側の電燈を消す）有難う！

ルイザ——あなた、どうかなさつたの？

ジョルヂ——どうもしないよ……、煙草を喫ふよ。

ルイザ——ええ。

ジョルヂ——何だえ、ぼくの方ばかり見て？

ルイザ——一寸變に思つたものですから、あなた何かいやな事があつたんぢやないでせうか？  
ジョルヂ——いや別に、疲れたんだらうよ、あんまり考へ事が多いので……。

ルイザ——さうですわ、色んな事をお考へになつて、しかしこの私の事はちつとも考へて下さらないのぢわ。

ジョルヂ——そりやお前の思ひ違だ、今夜はお前の事を考へ通しちやつたんだよ。

ルイザ——ほんとに？

ジョルヂ——ほんとうだとも。

ルイザ——あなたは本當に良い人ですわ。

ジョルヂ——なに、ぼくは良くはない、世の中にや良い男なんか一人だつてありやしない……、何のためそんなに電燈をつけておくの？

ルイザ——（天井の電燈だけ残して他のを全部消す）あなた眠いの？（彼の頭をクッションに包んで）さ、頭を少し凭らせなさいよ。

ジョルヂ——よさう、話でもしよう。

ルイザ——接吻して下さい。

ジョルヂ——ぼくは自分の癖をすつかり改良しようと思ふんだがね。

ルイザ——生活を複雑にしたのは私ぢやありませんわ。

ジョルヂ——お前でもなければ誰でもない、すべての人だ。

ルイザ——私を他の人と一緒にして貰つては困りますわ。

ジョルヂ——お前はぼくの生活に楽しい時を與へて呉れる美しい一つの生物だ。

ルイザ——それだけ？

ジョルヂ——そしてぼくは決してお前を忘れはしないだらう。

ルイザ——有難う。

ジョルヂ——我々の間に如何なる事が起らうとも……。

ルイザ——我々の間に如何なる事が起らうともつて？ それはどんな意味なんです？

ジョルヂ——ルイザ、その事については眞面目に話さなけりやならないよ。

ルイザ——なぜあなたは私から眼をお外しになるのです？

ジョルヂ——お前は一年前にエストリルの濱で過した最初の夜を覚えてゐるかね。

ルイザ——覚えてゐますわ。

ジョルヂ——エストラデホテルでだつたかね。

ルイザ——ええ。

ジョルヂ——おまへがぼくの手を執つて、あのホールに腰かけてぼくに願つた事があつたつけ、あれを覚えてゐるかね。

ルイザ——ほんの僅かばかりの事をお願いしましたつけ。

ジョルヂ——ぼくがいつもお前に對して誠實である事、決して嘘を言はぬ事、お前がぼくの言ふ事を本當に信じて聞く事、こんな事だつたつけね。

ルイザ——それでどうしました？

ジョルヂ——ぼくが感じる事を眞面目にお前に話す時が來たのだよ。

ルイザ——それを今迄まだ仰言らなかつたの？

ジョルヂ——さ、手をお出しよ。そしてお前の頭をぼくの胸に凭らしよ。お前は女を泣かせるには随分骨が折れるといふ事を知つてゐるかね。

ルイザ——でもあなたは私を一度も泣かした事ありませんわ。

ジョルヂ——しかし、本當の事を言はうか、この本當の事といふのは少し残酷すぎるけれども、

言はなければ始終お前を瞞してゐることになるから、今言はうと思ふんだ。

ルイザ——あなたの手は震へてゐますわ、どうかなすつたの？

ジョルヂ——お前を心配させたのを赦してお呉れ、しかしぼくはもうお前を愛してはゐないのだよ。

ルイザ——あゝ、ジョルヂ、何といふ事でせう！

ジョルヂ——ぼくはもうお前に飽きてしまつた。泣いてはいけないよ、ね、だからぼくがお前に眞に忠實であるやうにぼくを勵まさなくちやいけないよ。

ルイザ——もう、私こんな事にならうと豫期してゐたのでした。

ジョルヂ——女が愛され得るその極度まで、ぼくはお前を愛してゐた。お前の血も靈もみんなぼくのものだつた。お前は肉體的にも精神的にも全き支配をぼくの上に及ぼした時であつた。お前はぼくの「有頂天」であつた、しかしその有頂天は最早過ぎ去つた。すべてが過去となつてしまつた、そして今はお前が親しみ深い嬌態をしても、それは決してぼくに何等の興味も齎らさなくなつた。そしてぼくが、丁度今斯うしてお前を腕で抱けば抱く程、ぼくは我々二人の間のすべてが終つてしまつたのを益々はつきり感ずるやうになつたよ。

ルイザ——そりやあんまり残酷な言葉です。

ジョルヂ——お前はぼくが愛情的な言葉をかけてお前を苦しませた事について赦しを乞うてゐる事がわからないのか？ 人生はこんなものだよ、だから我々は人生そのままを受け入れなけりやならないのだ。ぼくがお前を愛するのに何の罪があらう？

またお前を愛する事をやめるのに何の罪があらう？ お前を愛せよ愛せよとぼくを促したのも、今またぼくをお前から遠ざけるのも、人には知られない同じ力なのだ。ぼくはどうしたらいゝのだらう？ ぼくは愛の永久なんか望まない、だから自分の運命に反抗せねばならぬのかなあ！ 一生愛せよと希ふ事、それは丁度春が一年中あれかしと願ふことと同じやうに不可能な事だ。

今迄我々の間に愛情といふものがあつただらうか？ お互にあきらめやうよ、ね、そして我々の愛の墓を花で被はうぢやないか。我々は感謝と慈愛を以て別れる事が出来るのに、虚言と嫌惡を以て互に別れなけりやならない必要がどこにあらう！

ルイザ——でも、ね、ジョルヂ、私あなたに捨てられるのが嫌です、あなたなしでは一日でも生きて居られないのです。

ジョルヂ——さうか。ではね、お前が望む間だけ一緒に暮さうよ。

ルイザ——私を見捨てないつて誓ひます？

ジョルヂ——しかし愛し合はないで忠實に意見を述べ合ふ二人のやうに、僕はお前に嘘を言はないで暮すのだよ。

ルイザ——でも、私あなたを愛してゐます、あなたが私を見捨てるなら、私死んでしまひます。

ジョルヂ——そりや女の常套手段だ。女は男に捨てられた時はじめて男を愛するやうになるものだ。

ルイザ——ね、私を可愛がつて下さい。

ジョルヂ——お前はぼくが接吻する時のやさしみを感じないのかね。

ルイザ——あなたが接吻して下さるのは私を残酷に殺すやうなものです。

ジョルヂ——ぼくがお前のために同情してゐる事を感じないのかね。

ルイザ——私を一層残酷に殺さうとなさる……。

ジョルヂ——お前はぼくも苦しんでゐる事を知らないのかね。  
ルイザ——そんな事ならいつそのこと一生涯嘘を言つて私を瞞しておいで下さい。

ジョルヂ——それは二人にとつて一番の苦痛だつたのだ。

ルイザ——自分勝手な人ね。

ジョルヂ——（彼女を愛撫して）私の哀れな友よ！

ルイザ——偽善者！

ジョルヂ——（彼女に接吻して）私の哀れな戀人よ。」

陶製の人形

華かな茶話會が開かれた後の古い大邸宅の一室。夜の九時、金色の戸棚の上に二個の陶器の人形が話し合つてゐる。

二人とも本物のセイブル産でL L B (一七五四)の印がしてある。

女人形、美しい容貌、小さい顔に白粉をぬり、薔薇色の斑點のある着物を着てゐる。

男人形、小さな侯爵、ステッキを持ち、三角帽を被つてゐる。

女人形——もうみんな出て行つてしまつたでせうか？

男人形——しかし他の部屋で人の話聲が聞えるやうだよ。

女人形——私ここで見た事にはすつかり驚いてしまひましたわ。

男人形——ぼくも見ない迄はあんなに狂態だとは思はなかつたね。

女人形——あの會は何と言ひましたつけ？

男人形——ファイブ・オックロック・チイだとか……。

女人形——私達の時代にも茶を飲みましたが、もつともつと優雅なものでしたわね。

男人形——そしてもつと行儀のある規則正しいやり方をしたものだつけ……。今の會へ来た婦

人達が「あなた、あなた」つて言葉を使つてゐた事を覚えてゐる？

女人形——でもそれは多分下女達が言つたんでせうよ。

男人形——そんな事があるものか、ぢや女中がお客と一緒に茶を飲むのかい？

女人形——さうですよ。殆んど裸體だつたぢやありませんか。

男人形——そりや理窟に合はない事だよ、ぼく達の時代には婦人が裸體でゐる時には紳士は一層恭々しくしたものだよ。

女人形——そりや陶器の人形ばかりでせう、あなたのやうな……。

男人形——人形でなくてもさうだつたよ、ブツフレル侯爵を覚えてゐるだらう、あの人は先づ許しを乞はなくては婦人に接吻しなかつたよ。

女人形——あの侯爵夫人は随分大勢の人に接吻を許しましたわね。

男人形——あの人も思ひ切りのいゝ婦人だつたよ、それでも胸など出して決して茶話會なんかに出なかつたからね。

女人形——今でもまだ、腕を露はにする流行があると見えますわね。

男人形——胸を開ける流行もあるよ、ボンパドール侯爵夫人のあの綺麗な胸をまだ覚えてゐる

かい？

女人形——あの露はにした脚もよく見ましたわ。

男人形——ぼくはあの脚は綺麗だとは思はないね。あの青い脚なんて……。

女人形——あの人程みつともない脚をしてゐた人はありませんでした。

男人形——そしてあの人ほどよく脚を露はにしてゐた人はなかつたよ、いつも斯うしてね……。

女人形——あの侯爵夫人が煙草を澤山喫つたのにはあきれましたわ。あの人が喫つてゐる恰好は面白いと思ひましたよ。

男人形——ぼく達の時代の嗅ぎ煙草と來たら尙更面白いと思ふよ。

女人形——私達の好きなあの嗅煙草！ あの金の煙草箱はなんと懐しいことでせう！ そしてまたその箱の中ししかけのしてあつたあの音楽の良かつたこと！

男人形——女が小さい手で一服つめる恰好ぐらゐ優しいものはなかつたね。まるで珠數を拵へるため一つ一つ取る人の手のやうでね……。

女人形——今では嗅煙草を喫つてもしとやかな態度で噓をする人なんかもうありませんわ。

男人形——何もかも下品になつた。今時の人は會話すら出來ないのだからね。

女人形——「會話する」といふ事は私達の時代の事で、今では「會話する」のでなく、單に「話をする」だけですわ。

男人形——その上話が下手とくるからね。ね、あの紳士達が婦人に言つた事を覚えてゐる？

女人形——聞きませんでしたわ、ではあなたは私を叩いたあの若い男を覚えてゐて？

男人形——うん、よく覚えてゐるよ、お前を壊さうとした奴だらう？

女人形——そしてあの若い男は私が陶器で出來てゐないだらうつて言つてゐましたつけ、あなたあの若い男が赤い帽子を被つた婦人に何を言つたか聞いて？

男人形——「あなたは全く私達男の心を惑はしますよ」つて言つたつけ。悉皆聞いちやつたよ。

女人形——あの言葉は何といふ事なんですの？

男人形——ありや甘い言葉だよ。男同志が集まれば女の話ばかりするし、女と男とが話す時はいつも馬の話ばかりだ。

女人形——馬だつてあの連中にはあきれるに相違ないわ。

男人形——女だつてあんな連中には愛想がつきるだらう、お前も氣がついたの？ 飄氣た事を言はうとすればすぐ野卑に流れるし……。

女人形——そして今では誰でも愛するといふ事を知りませんわね。

男人形——生活上の美點はすっかり壊しちゃった……。

女人形——果物を食べても、その香を嗅ぐではなし……。

男人形——まるで猿のやうだ。

女人形——私達の時代には「戀」とは媚びる事だと言つて、まあ、指の先に接吻する位のものでしたわ。

男人形——現今では「戀」はイチャツキだ、そして抓つたりひねつたり……。ぼくがさつき氣附いた事があるんだけど、何だか知つてゐる？ 流行を追ふものは却つて四十男だよ。

女人形——丁度それはレダを我物にしたジュピターの年ですわ。

男人形——そしてそのため白鳥は年を寄らないんだ。

女人形——あの半白の頭の人を女達が圍んで随分はしやいでゐましたが、あれを見て？

男人形——女達はもう若い男にちつとも興味を持つてゐないね。

女人形——あの金髪の蝸牛卷の女は小馬に乗れないなんて言つてゐましたつけ。

男人形——ぼくが発見した事だけれど、あの女達は子供のやうだね。そしてあの女達はふくれ

た胸も腰も持つてゐなかつたぢやないか。

女人形——そして若い男達は女のやうね、若い男のくせにふくれた乳を持つてゐた人を見て？

男人形——そしてお化粧して……。

女人形——丁度私達の時代のやうに……。

男人形——たゞ琥珀毛織の着物がないだけだ。

女人形——そして舞踏曲を奏する象牙の笛がないだけ……。あの人達の踊つてゐた踊はなんで

せう？

男人形——タンゴとホックストロットだよ。

女人形——あの行儀の悪いつたら何て事でせう。男達が女にピッタリひつ付いて歩いてゐたのを見て？。

男人形——みんな踊は我々の時代の踊とは随分異つてゐるね。

女人形——エキゾテヤリリの舞踏曲と來たら、實によかつたね。

男人形——あのお辭儀のし具合、手にし合ふ接吻、飛び散る白粉など思ひ出すよ。

女人形——一對の男女がたゞ指の先を觸れ合はしたものでしたが、あなた覚えてゐて？ でも



随分美しいものでしたわよ。

男人形——あゝ、ぼく達が陶器でなかつたらなあ！

女人形——えゝ、陶器でなかつたら九時が鳴ればミヌエテを二人で踊るんですがね。

男人形——下男が燈を消しに来たらしいぜ。

女人形——いゝえ、あれはこの家の主人夫婦ですよ。あの欠伸をしてゐる様はどうでせう。

男人形——あの二人の心は全然はなればなれになつてゐるのだ、愛も羨もあつたもんぢやない。

女人形——あの女は私達を見てばかりゐたあの士官と、今晚の舞踏會の始めから終り迄戀に耽つてゐましたつけ……。

男人形——そしてあの男はづう／＼しくも、杖を持つて來た例の金髪のアメリカ女に媚びてゐたつけ……。

女人形——二人とも目を盗み合つて好きな事やつてゐるんですわ。

男人形——それが一番幸福なのだらう……。や、燈を消しちやつたぜ。

女人形——ではお休みなさい！

男人形——お休み！

### 三個の指環

或る古物商の陳列窓。彫刻、陶器、扇子、古びた陶製人形、十八世紀時代の密書、それらの間に在る陶器の皿の上に、三個の指環が眠つてゐる。

A 指環、古いダイヤ、侯爵夫人とも言ふべき上等のもの。他の B 指環、C 指環は普通の平凡な結婚指環である。

太陽が陳列棚を照してゐる。人々が道を通り過ぎる。

三個の指環が會話をしてゐる。

A——貴金屬が話をしないなんて思ふ人は随分馬鹿ですわね。

B——そして貴金屬は聞く事が出来ないと思ふ人もね。

C——そして貴金屬には感じがないと思ふ人も……。感情を持つには心はいらないものだ。

B——女は心を持つてゐるが、そのくせ深い感情を持つ事が出来ないのだね。

C——誰でもさうだよ。

B——ぼくはさういふ一人の女を知つてゐるぜ。

C——ぼくも一生を賭して愛した女を知つてゐるよ。

A——女は十人十色ですわ。

B——ぼくの知つてゐる女は放蕩な女でね、一度に二人の男を戀したんだぜ。

C——そいつあ結局 つちも戀してゐなかつた事になるんだね。

A——この店のお老人は、わたくしたち三人を一緒にさして置くなんて、まったく良い考へつきですわね。

B——兎に角話が出来るからな。

C——きみも花嫁の指環かえ？

B——うむ、だが A さんはさうぢやないらしいね。

A——私もさうよ、でも餘程昔の事よ。コロンピナが笑つた時代のもので、私は侯爵夫人と稱ばれたものですわ。

C——おちいさん！

B——侯爵殿！

A——あなたに彫りつけてあるのは何時の日附なの？

B——五月二十日。彼女が結婚した日だ……。

C——薔薇が結婚する月だな。ぼくには日附が彫つてないや。

A——何故なの？

C——「永久」には、日の制限がないからさ、そして、彼女がちかつた戀は、永久だつたから……。

B——ぼくは永久の戀といふ事をよく知つてゐる、それは一時間ばかり續く戀だよ。

C——いや、一生涯續く戀だよ。

B——花のいのちよりも果敢ない戀があるんだもの。だから、ぼくは女に愛の存在をみとめな  
いね。

A——わたしも亦男に愛の存在を認めませんね。

B——あなたの最初の持主は誰だつたんですか？

A——もう十八世紀の事ですから、ずつと以前の事ですわ。

C——あなたは今でも彼女を思ひ出すだらうとぼくは信じてゐますがね。

A——私の持主はチェポロの描いた繪のやうな人でしたわ。二十九歳で、碧い眼をしてゐて、私をブラジルのダイヤモンドで誂へて拵へさせたのですよ。私のやうにあんな美しい手の上

に住んだ事のある指環はないと私は思ひますわ。

B——金髮女の綺麗な手なんですね。

A——え、フローレンス女の手です。氣高い高尚な手、品のある感覺の鋭い手でした、主君者のやうで、薄く黄金色をして百合の花のやうに細長い手でしたつけ。私あんな美しい手は見た事がありません。あの手の愛撫は人を保護し維持すると言つたやうな峻嚴な風を持つてゐました。彼女の指と指との接觸は丁度暖いピロイドの接觸するやうでした。私はその指の間に一年も生活してゐたのです。その間私は彼女の幸福と不幸を緒に分つ腹心の一人でした。それから暫くの後、彼女の夫は彼女を捨ててしまつて他の女とフランドルの方へ駆け落してしまつたのです。土地より土地へと落ちのびて、遂にベニスの町のサンマルコの廣場で決闘の結果死んでしまつたのです。男は自分が愛した女を失つても平氣で居られるものですが、女といふものは愛した男がゐなくなると永久に悲嘆に暮れるものです。彼女が夫の死を知つた時、アンナマリア(彼女の名)は心から喪に服して、カメルン宗派の白地の着物を着て世を捨てたのです。そして私は女神の手のやうに美しいあの手、モンナリザ・ヂョコンダの手のやうに傲慢な嚴格な手から離れてしまつたのです。

B——それでここへ来たんですね。

A——さうです。

C——瞞すのは必ずしも女に限らないな。

B——でも大抵の場合はさうだよ。神は「虚言」が必要なので女を創られたのだ。

A——そしてあなたの御主人はどなたでしたの？

B——そら、あそこに陶器の人形があるね、丁度あんな女でしたよ。

C——きみは永い間その女の所有になつてゐたのかい？

B——たつた六ヶ月さ。嫌な小さな亂暴な手でね、愛撫するとか懇願するとかいふ事を知らない手だつたよ、そしていつも搔きむしつて負傷してゐる手だつたよ。虚偽で邪悪で桃色の眞珠母貝が口を開いたやうな手は金髪女に限られてゐるね。そんな奴の側にゐるとぞつとするよ。その手は透つてはゐるが、神経質で、青白く、靜脈が浮き出てゐて、落ちつかず、いつも動いてをり、そして淫蕩的だつたよ。こんな女に精神とかいふものがあつたらそれはその嫌な手の中にあると言つてもいいね。彼女は結婚した。夫は彼女を非常に愛した。その時分ぼくは彼女の手に住んでゐた。ぼくは彼女の軟い香水の香を六ヶ月間も吸つて彼女と輕薄な

存在を共にし、彼女の虚言を聞き、彼女の殘酷さを目撃したのだが、あの冷淡な陶器のやうな手がお祈りの時に限つてよくも合掌すると思つたよ。  
或る夜であつた。庭の木蔭に一人の宿命の男が現はれたのだよ、それから暫くしてマリア・ルイザ(彼女の名)は彼と騙け落してしまつたのだ。彼女の數多の寶石類の中でリモージェ製の古い金庫の底に枯れた花束と一緒に彼女が残したものは、彼女の結婚指環であつたこのぼくだけだつた。其の後ぼくは賣られてしまつた。それからぼくと彼女は色々の人の手を歩きまはつてゐたのだよ。

A——それでああなたはあなたの女主人が不義をした故にここに來てゐるわけですね。

B——うむ、彼女が驅落ちしちやつたからね。

C——可愛相に、彼女は今頃はきみよりもつとひどい目に逢つて、悪い人達の手から手へと移つてゐることであらう。

B——ぼく達のやうな哀れな結婚指環の命は薔薇の花のやうに果敢ないんだなあ！

A——愛が亡くなつたら最後、わたくしたちは見向きもされずに、隅の方へ捨てられてしまうのですわ。

B——量り賣りにされて……。

A——まだここには本當の愛を知つてゐる人がゐる筈ですが……。

C——ぼくがその愛を知つてゐるよ。

B——虚偽、肉慾、見捨てる事、そんなことに對抗する愛かね？ 誰がその愛を知つてゐるんだい？

C——ぼくさ。

A——あなたが？

C——ぼくは四十年間も同じ女の手に暮したよ。美しくはなかつたが善良な愛撫的な手で、慰め、また赫すことを知つてゐる手だつた。世の中には香油のやうに人を慰める甘さを持ち、二十歳時代の猛烈な熱情を以つて戀する時でも、慈愛に富んだ手があるものだよ。ぼくはこんな手に出合はうとはなんて幸福だつたらう。その手は若かつた。祈る時は祈り、働く時は働いた。やがて、その手は男の鍾愛を受けてゐる内に次第に老いて、靜かに幸福に、愛され接吻された花のやうに遂には凋んでしまつた。そして終ひにはキリストの磔刑像のやうに十字架に磔られて最後の夢を祝福し乍ら眠つて了

つたのだ。そしてぼくは彼女が死ぬ迄その手から離れなかつた。

A——ではあなたは本當の愛を知つてゐますか？

C——ぼくは三人の中で、一番幸福だつたよ。ぼくは彼女が亡くなつたので此處へ來てゐるのだから……。

(一九二四年八月一日譯了)



「海外文學新選」總旨

- ◆近代文學の未だ紹介せられざる名篇と共に時代に先驅する最新の作品を網羅し、パンフレット型の廉價版として公にする。
- ◆全然原語より移して一切の重譯を避けるは勿論、編纂者に於いて十分の信用を置き得可き譯と認められたもののみを收める。
- ◆第一期刊行として既に決定せるもの百五十冊。毎月一冊以上三冊以内を隨時出版する。

第一期百五十冊發行

大正十四年三月廿八日印刷  
大正十四年四月九日發行

◆結婚の夜——價六拾錢

翻譯者 關 一 雄

發行者 東京市牛込區矢來町三番地 佐藤義亮

發行所 東京市牛込區矢來町三番地 新潮社

電話牛込 八八〇〇〇  
振替東京 一七四二番

印刷所 東京市小石川區西江戸川町 富士印刷株式會社  
電話小石川 五九二番

——「結婚の夜」了——



515

130



終